岐阜県文化財保護センター調査報告書　第49集

ホヤノ木古墳

県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
乙姫２期工事に伴う緊急発掘調査報告書

１９９９

岐　阜　県

財団法人　岐阜県文化財保護センター

序　　文

本報告書は、平成10年度に実施した、県営揮発油税財源身替農道整備事業乙姫２期工事に伴う記録保存のための発掘調査をまとめたものです。発掘調査を行った遺跡は、恵那郡坂下町に所在するホヤノ木古墳です。

坂下町は、岐阜県南東部の山間部に位置し、長野県と接しています。町内には縄文時代の遺跡としてよく知られる椛の湖遺跡や門垣外遺跡があり、また、古墳時代の椛の湖２号古墳では、直刀が５本も出土するなど、木曽谷を介して美濃と信濃を結ぶ歴史的に重要な地域と言えます。

ホヤノ木古墳は、戦前及び戦後に２度にわたって主体部の発掘が行われ、土師器や須恵器、直刀が出土しておりますが、このたびの道路建設計画により古墳を現状のまま残すことができなくなったため、発掘調査を行うこととなりました。今回の発掘調査によって、古墳の様子を記録にとどめ後世に伝えるとともに、その成果を県民共有の財産として活用できることを願っております。

なお、本報告書が刊行されるまでには、関係諸機関ならびに関係者各位、坂下町、坂下町教育委員会、地元地区の皆様から、終始多大な御援助、御協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

平成11年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　村　木　光　男

例　　言

1　本書は恵那郡坂下町字西高辺に所在するホヤノ木古墳（岐阜県遺跡番号21561―01493）の発掘調査報告書である。

2　本調査は県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業乙姫２期工事に伴うもので、岐阜県恵那土地改良事業所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は平成10年度に実施し、成瀬正勝（当センター調査員）の助言・協力を得て春日井が担当した。

4　本書の作成は、第２章第２節を原寛氏（坂下町文化財審議委員会委員長）と共同で行い、他は春日井が担当した。

5　古墳時代の遺物の編年観については、城ヶ谷和広氏、内堀信雄氏、井川祥子氏から御教示をいただいた。また、石器の選別については増子誠（当センター調査員）から助言を得た。なお、石器の石材鑑定は藤岡比呂志（当センター調査員）の肉眼観察による。

6　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

井川祥子・内堀信雄・城ヶ谷和広・原　寛・坂下町握自治会・坂下町下外自治会
坂下町産業課・坂下町教育委員会

7　水準測量及び調査前地形測量は株式会社国際航業に、空中写真測量はアジア航測株式会社に委託して行った。

8　本文中の方位は、国土座標系の座標北を示している。

9　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1993『新版標準土色帖』を参照した。

10　調査記録及び出土品は、（財）岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序　文　　（財）岐阜県文化財保護センター理事長　村木光男
例　言
目　次
第１章　発掘調査の経過……（春日井）……１
　第１節　調査に至る経過……１
　第２節　発掘調査の経過と方法……２

第２章　遺跡の環境……５
　第１節　ホヤノ木古墳の位置……（春日井）……５
　第２節　周辺の遺跡……（原・春日井）……５

第３章　調査の結果……（春日井）……８
　第１節　基本層序……８
　第２節　ホヤノ木古墳……８
　第３節　縄文時代の遺構と遺物……14
　第４節　参考資料……18

第４章　まとめ……（春日井）……22
写真図版

写真図版目次

図版１　空中写真、ホヤノ木古墳遠景
図版２　調査区全景
図版３　調査区近景、調査前のホヤノ木古墳、石室内清掃後、石室内表土除去後、東側壁の状況、墳丘南裾の転落石、作業風景
図版４　東側壁の状況、西側壁の状況
図版５　調査区全景
図版６　石室検出状況
図版７　ホヤノ木古墳検出状況、奥壁及び西側壁
図版８　奥壁裏土層、東側壁裏土層、墳丘解体状況、奥壁自然石転用状況
図版９　東側壁裏墓坑検出状況、西側壁裏墓坑検出状況、西側壁、土坑１、土坑２、土坑３
図版10　土坑４、土坑５、遺物出土状況、土師器・須恵器・直刀
図版11　土師器・須恵器、縄文土器・石器
図版12　打製石斧

挿　図　目　次

図１　ホヤノ木古墳の位置……１
図２　調査区現況測量図……４
図３　周辺遺跡位置図……７
図４　基本層序……８
図５　墳丘平面図及び主体部墓坑実測図……９
図６　墳丘断面図……10
図７　石室実測図……12
図８　土師器・須恵器出土位置……13
図９　ホヤノ木古墳出土遺物実測図……13
図10　土坑実測図……15
図11　縄文時代の遺物出土位置……16
図12　縄文土器実測図……16
図13　打製石斧法量分布図……17
図14　打製石斧実測図……17
図15　石鏃・剥片石器実測図……18
図16　参考資料……20
図17　坏蓋（尾張系）法量分布図……22
図18　坏身（尾張系）法量分布図……23
図19　坏身（非尾張系）法量分布図……23
図20　石室の石積み方法……24
図21　側壁と主体部墓坑との関係……25
付図　ホヤノ木古墳調査区平面図

表　目　次

表１　土器観察表……21
表２　石器観察表……21

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

当遺跡は、恵那郡坂下町坂下字西高辺に所在し、木曽川右岸の丘陵上に位置する。古墳の存在は古くから知られており、大正年間及び終戦直後に発掘が行われ[1]、土師器や須恵器、直刀が出土し、町教育委員会によって保管されている。

今回の道路建設計画では、この古墳が敷地内に含まれることや、周辺に未確認古墳の存在を想定して[2]、古墳を含めた約1,000㎡を調査範囲として調査を行うこととなった。岐阜県農政部恵那土地改良事業所から岐阜県教育委員会を通じて委託を請け、当センターが平成10年度に発掘調査を実施した。

1）原寛氏のご教示による。

2）坂下町史（坂下町1963）には、古墳であるか否か決定できないものとして「ホヤノ木古墳の北にある盛り土、～」、また、原氏によれば「当初２～３基をなしていた～」（原寛1987「町内遺跡の現況」『観音畑・上平遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会）との記載がなされていた。

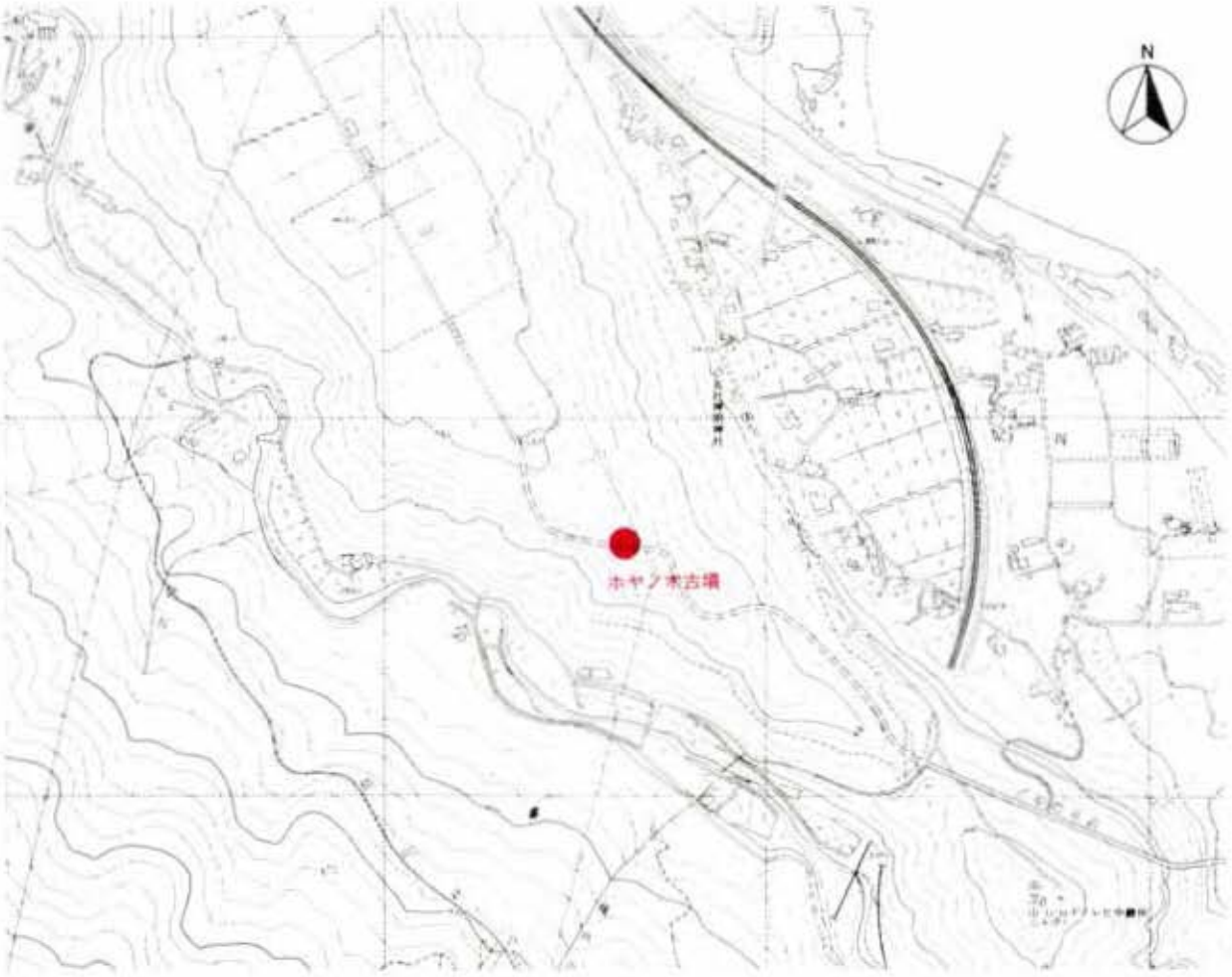


図１　ホヤノ木古墳の位置（S＝1/10,000）

第２節　発掘調査の経過と方法

発掘調査範囲は、ホヤノ木古墳を含めた1,000㎡を予定していたが、樹木伐採後現地において検討したところ、排土置き場の確保や空中写真測量の際に周囲の植林の影響を避けるため、まず800㎡の調査区を設定し、必要があれば調査区を拡張することとした。表土除去前に現況地形測量（図２）を実施したところ、ホヤノ木古墳から北西20ｍの場所に人工的な地形の改変が認められる部分があり、また、北側10ｍの位置には石室の奥壁のような立った状態の岩を確認したため、これらを取り込むようにして調査範囲を決定した。最終的にはこれらは古墳ではないことが判明したため、調査区の拡張は行わなかった。

調査区内は国土座標上の南北方向を基準とし、５ｍ×５ｍに区画した。調査区画は、東から西へＡ～Ｈ、北から南へ１～８とし、調査区画の呼称は東北角の杭番号を用いた。調査は、まず重機によりホヤノ木古墳の墳丘以外の表土を除去し、以下すべて人力で掘削した。調査地には多くの上野玄武岩が地表に見られ、表土掘削時からこの岩のため作業はかなり困難な状態であった。表土下層（II層）以下を掘削する際にも、板状に割れた上野玄武岩や樹木の根が非常に多いため、作業の遅延を余儀なくされた。墳丘上には、本来天井石や側壁として使われたものと思われる大きな石材があり、これらの除去作業も困難を伴うものであった。墳丘及び石室は可能な限り解体し、その構築状況の記録に努めたが、墳丘解体時にはその中に上野玄武岩が含まれていたり、側壁にかなり大きな石材が用いられていたため、人力での作業では限界を感じさせるものであった。発掘調査全般において、土を除去する作業同様に石を取り除くことに多くの労力を必要とした。

発掘調査は５月下旬から９月下旬の約４ヶ月にわたって実施し、その後10月から翌年３月にかけて整理作業及び報告書作成作業を実施した。以下、発掘調査の体制及び週毎の調査経過を記述する。

［(財) 岐阜県文化財保護センター調査部］

調査部長　　山元敏治

調査部次長　　高橋幸仁

担当調査課長　　片桐隆彦

担当調査員　　春日井恒

発掘作業従事者　糸魚川正二、可知里美、中村昭徳、林幸子、原正明、原寛、安江俊幸、吉村浩幸

［調査経過］

第１週(5.25～5.29)　25日～28日に現況地形測量（国際航業㈱に委託）を実施。27日～28日に現場事務所の設営及び調査機材の搬入。

第２週(6.1～6.5)　１日に調査区の設定。２日から墳丘部分を除き重機による表土除去を開始。

第３週(6.8～6.12)　８日に調査区画杭の設置（国際航業㈱に委託）。９日から作業開始準備。

第４週(6.15～6.19)　15日から発掘作業員を入れての作業開始。重機による掘削残土除去及び表土下層（II層）をやや掘り下げての遺構検出作業。H4区から打製石斧が出土。16日から墳丘の表土除去及び石室内の流入土除去作業開始。17日に石室内土層実測を行うが、大半が撹乱を受けていた。

第５週(6.22～6.26)　調査区内には岩が多い上、伐採した樹木の株や根が深くまで入り込んでいるため、掘削残土除去及び遺構検出作業は非常に困難。４～５ラインの遺構検出作業実施。24日E4区～F4区にかけて溝状の落ち込みを検出するが、山道の痕跡と判断。25日墳丘南裾で石室転落石及び閉塞石と思われるもの検出。

第６週(6.29～7.3)　１日にC6区から縄文土器片出土。墳丘周囲では周溝を検出することにつとめたが確認困難。５～７ラインの遺構検出作業実施。３日にC8区～D8区において打製石斧及び土師器片が出土。この辺りに以前の発掘時の石室掘削土が捨てられているものと判断。

第７週(7.6～7.10)　６日にD8区から打製石斧及び土師器片が出土。５～８ラインの遺構検出作業実施。７日から墳丘の主軸及びそれに直交する方向にトレンチを設定し、周溝及び墳丘裾部の立ち上がりを確認する。周溝は確認できなかったが、墳丘盛土はII層の上から始まることを確認。D8区からチャート製フレーク、E7～E8区から須恵器片出土。

第８週(7.13～7.17)　13日にC8区から縄文土器片、D8区から須恵器片出土。14日には、掘削残土除去及び遺構検出作業は大半を終えるが、F7区～G8区にかけてはかなり表土層が厚く堆積し、作業は難航する。６～８ラインの遺構検出作業実施。石室開口部の転落石をトータルステーションにより略測。15日と17日にF8区から打製石斧出土。

第９週(7.21～7.24)　21日からII層掘削作業及び地山面での遺構検出作業を開始。22日にE2区地山面にて土坑１検出。同日石室内の精査を行うが、排水溝などは確認できなかった。また、墳丘南側においても遺構検出作業をあらためて行うが、墓道らしきものは確認できなかった。24日にF4区地山面にて土坑２検出。同日から石室実測を開始する。

第10週(7.27～7.31)　４～５ラインの遺構検出作業実施。30日にG6区地山面にて土坑３検出。31日から墳丘検出作業開始。

第11週(8.3～8.7)　４～６ラインの遺構検出作業実施。５日に当センター成瀬正勝学芸主事による、石室構造や墳丘の調査方法についての調査指導。６日にB7区地山面にて土坑４検出。６日から墳丘裾部に設定していた３カ所のトレンチを墳丘中程まで拡張するが、周溝や外護列石といったものは確認できなかった。

第12週(8.10～8.14)　作業休止。

第13週(8.17～8.21)　６～８ラインの遺構検出作業実施。17日にD6区から須恵器片出土。18日から閉塞石をはずし、石室開口部の検出作業を行う。

第14週(8.24～8.28)　24日にD5区から石鏃片、D8区～E8区から須恵器片出土。26日にF8区で縄文土器片と打製石斧出土。27日に空中写真測量及び調査区全体写真撮影実施。28日からサブトレンチを拡張して墳丘断割り作業を行う。

第15週(8.31～9.4)　２日から墳丘土層実測開始。４日から墳丘の解体作業を開始し、順次石室石材の積み方を確認する。墳丘解体作業は、盛土を除去した後写真撮影を行い側壁を順次はずしていったが、盛土内にも石が多く含まれていた。

第16週(9.7～9.11)　８日から主体部墓坑の検出作業を開始。10日に再度当センター成瀬学芸主事による側壁石積みについての調査指導。主体部墓坑と石積みとの関連性を確認する。

第17週(9.14～9.18)　14日主体部墓坑の実測及び墳丘解体状況の写真撮影。17日に排土置き場の養生、調査道

具の片づけを行い、発掘作業員による作業を終了した。なお、調査道具の搬出、現場事務所の撤収は9月28日～30日にかけて行った。

10月1日からは当センター三田洞整理所において整理作業に入り、翌年3月末日をもって発掘調査を完了した。

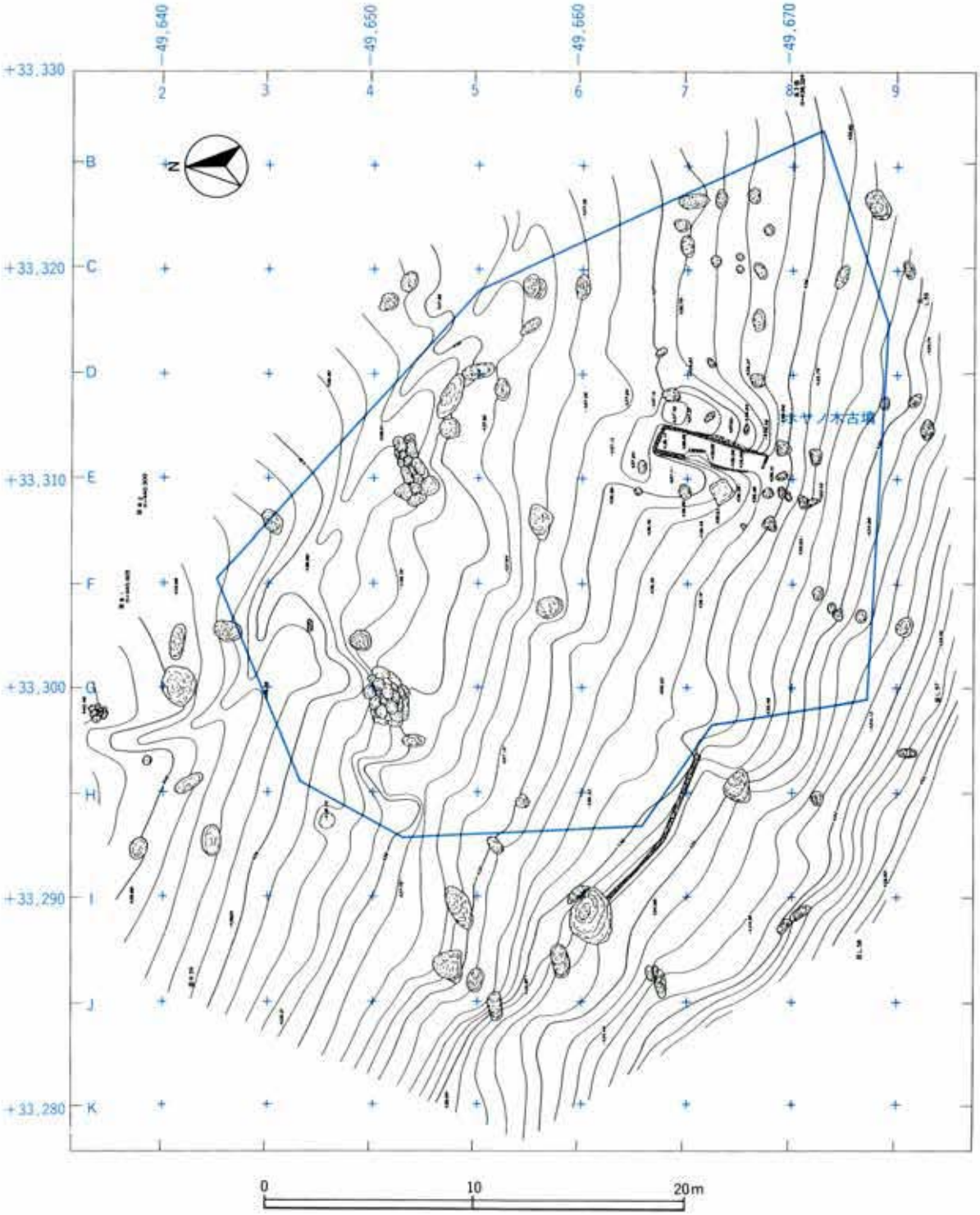


図2　調査区現況測量図（S＝1/300）

第２章　遺 跡 の 環 境

第１節　ホヤノ木古墳の位置

岐阜県東南部に位置する坂下町は、周囲を山に囲まれた渓谷盆地の町で、長野県木曽郡山口村、南木曾町と木曽川を隔てて接しており、ちょうど木曽谷の入り口にあたる。町域の東には木曽川が南北に流れ、北から川上川が坂下町市街地の西側を流れて木曽川に合流する。盆地内は木曽川及び川上川によって形成された河岸段丘が発達し、集落や耕地として利用されている。町域の西北部にあたる川上川右岸には、起伏の少ない台地が広がり、人造湖である椛の湖がある。ホヤノ木古墳は、川上川右岸の上野台地から南東に延びる丘陵が、外洞川と木曽川に挟まれて舌状となった先端部近く、標高約436ｍのところに位置する。この台地から丘陵にかけては、上野玄武岩が分布していおり[1]、古墳の石室石材としても利用されている。ホヤノ木古墳の西には外洞川を挟んで高峰山（944.7ｍ）があり、東側には木曽川によって形成された河岸段丘が眼下に広がる。

１）岐阜県企画部地域振興課1990年『岐阜県土地分類基本調査「付知」、「妻篭」』。

第２節　周 辺 の 遺 跡

坂下町内には、縄文時代草創期の遺跡として著名な椛の湖遺跡[1]の他、縄文時代の遺跡は数多く確認されており、発掘調査も門垣外遺跡[2]、星の宮遺跡[3]などで行われ、貴重な成果をあげている。縄文時代早期や中期の遺跡は多いものの、前期や後期、晩期の遺跡は少なく、弥生時代の遺跡に至ってはさらに少なくなる。古墳時代の遺跡は増加し、椛の湖古墳群、氷坂古墳群など10数基に及ぶ古墳や観音畑遺跡や上平遺跡などで集落跡と思われる遺跡が確認されている[4]。奈良時代以降では、確認されている遺跡は非常に少なくなるが、奈良時代から平安時代頃の遺構・遺物が上平遺跡の発掘調査において検出されている[5]。金屋遺跡では中世の梵鐘鋳造遺構を検出しており[6]注目される。

これまでに確認されている古墳は、上野台地やそこから南東に延びる丘陵上、河岸段丘上に位置している。

上野台地に所在するのは、椛の湖古墳群、上原古墳、カンシショウ古墳[7]である。椛の湖古墳群は、上野台地上に造られた人造湖である椛の湖の湖底に位置する。椛の湖１号古墳は、大正末年から昭和初年に壊され、古墳の状況や位置についても不明であるが、２号古墳の南約30ｍの場所にあり、直刀１口、坏３個の出土があったと伝えられる。椛の湖２号古墳は、戦前は「火塚」という名称で呼ばれ、神聖な場所として山の神が祀られていた。この２号古墳の南には１号古墳の他にも数基の古墳があったようであるが、昭和26年の椛の湖築堤工事の際に削平されてしまい、状況は全く不明である。椛の湖２号古墳は、築堤工事に伴い発掘調査が行われ、昭和33年には石室実測のため石室内を清掃中に直刀２口、須恵器提瓶１個が出土し、古墳の時期は７世紀前半とされている[8]。また、この古墳から出土した直刀は５口にも及び、この古墳の被葬者を考える上で重要である。カンシショウ古墳、上原古墳については詳細は不明である。上野台地には上野本郷遺跡[9]、熊久保遺跡[10]、薬師口遺跡、金屋遺跡など古墳時代の遺跡が確認されているが、いずれも未調査もしくはごく限られた範囲での調査のため、

古墳との関連は不明である。

上野台地から南東に延びる丘陵上に所在するのは、氷坂古墳群[11]とホヤノ木古墳である。氷坂古墳群では4号古墳が木棺直葬墳であったと伝えられ、2号古墳は神社社殿の下であるため内部主体は不明であるが、他はすべて横穴式石室を内部主体とする古墳で、3号古墳と5号古墳が発掘調査されている[12]。出土した遺物により1号古墳は6世紀末～7世紀、3号古墳は7世紀前半～中葉、5号古墳は6世紀後半の時期と考えられており、5号古墳については7世紀代に追葬が行われたとされる。これらの古墳との関連が推測できそうな遺跡としては、河岸段丘上に高部遺跡、観音畑遺跡、上平遺跡などがある。観音畑遺跡では5世紀～7世紀頃の竪穴住居跡3棟、上平遺跡では16棟の6世紀代から10世紀の竪穴住居跡を検出している[13]。

河岸段丘上に所在する古墳には川上川右岸西方寺地区の万治屋塚古墳群[14]、川上川左岸寺屋敷地区の中山古墳[15]が確認されている。万治屋塚2号古墳は、調査の結果石室を持たない木棺直葬墳で、5世紀後半頃のものとされている。

このように坂下町では、10数基の古墳が確認され、一部のものについては発掘調査が行われている。しかし、周辺の隣接する地域では、木曽川の対岸となる木曽郡山口村で3基の古墳が確認されている他、中津川市を除いて古墳は未確認である。こうした古墳の分布状況は、坂下町の位置が木曽谷の入り口にあたる場所であり、また、上野台地を抜けて飛騨へも通じる位置にあることと無関係とは考えにくいのではないであろうか。

1）紅村弘・原寛1974『椛の湖遺跡』坂下町教育委員会。

2）紅村弘他1976『門垣戸遺跡』坂下町教育委員会、なお、遺跡名については坂下町史（坂下町1963）や県遺跡地図（岐阜県教育委員会1990『岐阜県遺跡地図』改訂版）などでは「門垣外遺跡」と表記されており、これに従った。

3）紅村弘他1975『金屋・星の宮遺跡』坂下町教育委員会。

4）原寛他1987『観音畑・上平遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会。

5）4）に同じ。

6）3）に同じ。

7）坂下町史にある「監視哨（所）付近」の古墳をさすと思われ、第2次大戦末期に監視哨（所）を造った際に小型の石室があったと伝えられている。なお、『岐阜県遺跡地図』には「カンショウ古墳」と記載されているが誤植と思われる。

8）坂下町1963『坂下町史』。

昭和26年の調査では、直刀2口、刀子2口、鉄鏃3本、須恵器高坏1個、人骨などが出土したが、現在は所在不明となっている。翌年には工事関係者により調査時の排土中から直刀1口、鉄鏃1本が採集された。

9）県遺跡地図には記載されていないが、基盤整備事業の際に土師器、須恵器片が採集されている。

10）県遺跡地図には縄文・弥生時代の遺物散布地とされているが、坂下町史では調査によって古墳時代の竪穴住居跡を検出したとある。

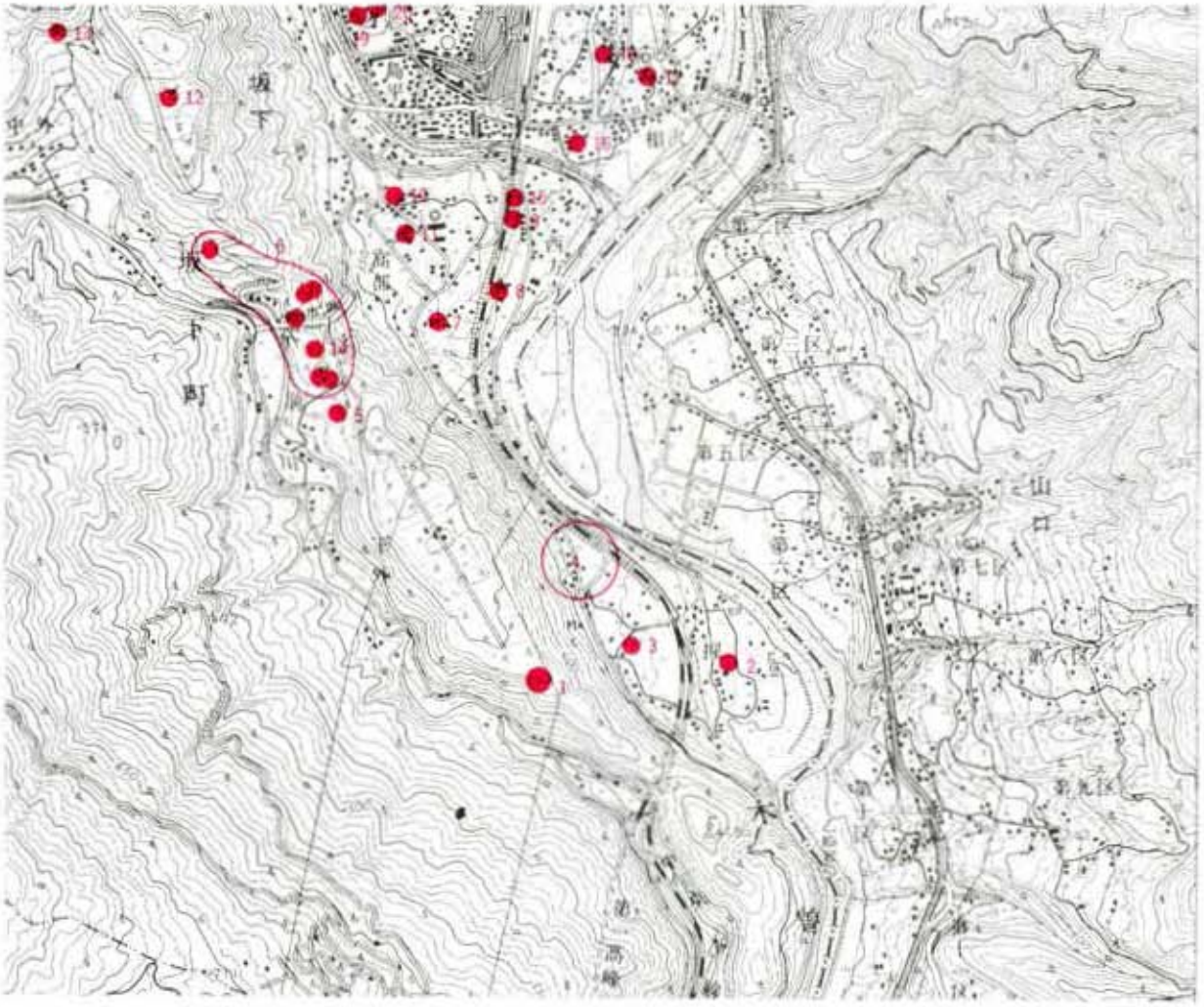
11）県遺跡地図には1号古墳から6号古墳の6基の古墳が記載されているが、町史には1号古墳から5号古墳の5基の古墳と1号古墳付随古墳として2基の石室が報告されている。この1号古墳付随古墳とされているものを2基の古墳とすると、氷坂古墳群は全7基となる。なお、他にも5号古墳の近くでの道路工事中に、石室を持つ古墳が発見されたが、そのまま破壊されたと伝えられる。

12）坂下町史の他、原寛1987「町内遺跡の現況」『観音畑・上平遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会。

13）４）に同じ。

14）県遺跡地図では「万治屋塚古墳」とされているが、２号古墳の発掘調査報告書（岐阜県教育委員会1967『坂下町遺跡発掘調査報告書』岐阜県文化財調査報告書第６集）によれば、昭和41年に２つの塚が古墳であると確定したと記述されているため、「万治屋塚古墳群」とした。

15）県遺跡地図には記載されていないが、坂下町史には中山稲荷の社殿付近に古墳があったと伝えられていることが記述されている。



国土地理院発行　1：25000地形図（妻籠）より

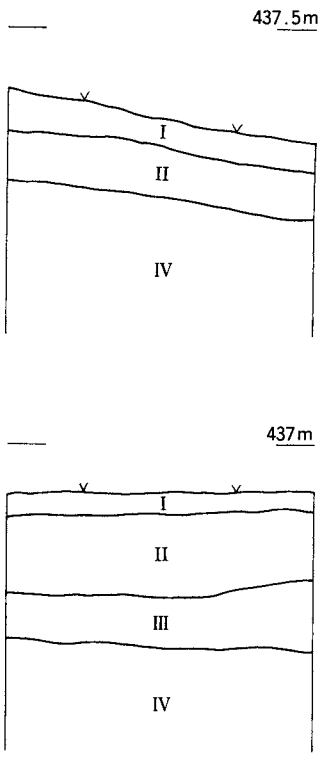
図３　周辺遺跡位置図（S＝1/25000）

1．ホヤノ木古墳　2．下島遺跡（縄文）　3．上平遺跡（縄文・古墳～中世）　4．観音畑遺跡（A地点からD地点、縄文・古墳～中世）　5．下原遺跡（縄文・弥生）　6．氷坂古墳群（古墳）　7．南遺跡（縄文）　8．西方寺跡（室町）　9．万治屋塚古墳群（古墳）　10．巾遺跡（縄文）　11．高部遺跡（古墳）　12．濃ヶ池遺跡（縄文・弥生）13．カンシショウ古墳（古墳）　14．氷坂遺跡（縄文）　15．万治屋塚遺跡（縄文）　16．相沢遺跡（縄文）　17．星の宮遺跡（縄文）　18．古庵遺跡（縄文）　19．中山古墳（古墳）　20．三井寺古墓（中世）

第3章　調 査 の 結 果

第1節　基 本 層 序

層序は(図４)、調査区全体で比較的安定しているが、場所により異なる土層が堆積する部分が認められる。第Ｉ層は表土で、新しい溝状のもの（山道もしくは土地の境界）は概ね地表面において確認できた。第II層は暗褐色粘質シルトで炭を多く含んでいる。古墳の墳丘は、この上面から盛土されている。また、第II層からは縄文時代の遺物が出土している。第III層は炭化物を非常に多く含む黒褐色シルトで、調査区の南西部にのみ認められた土層である。第IV層は褐色粘質シルトで礫を多く含むが、この上面で土坑を検出した。



I　10YR2/3　黒褐色シルト（表土）
II　7.5YR3/4　暗褐色粘質シルト
III　7.5YR3/2　黒褐色シルト（炭化物多く含む）
IV　7.5YR4/6　褐色粘質シルト（岩・礫多く含む）

図４　基本層序（Ｓ＝１/20）

第2節　ホヤノ木古墳

（１）　調査前の状況

古墳は、丘陵の尾根からわずかに西へ下がった斜面に位置する。調査前は、植林や雑木のため墳丘の状況は不明瞭であったが、戦前、戦後の２度にわたる石室内部の発掘により天井石は外され、石室は開口していた。さらに、一部の側壁は石室内部に転落していたり、墳丘上に捨てられていた。伐開後の現況測量では、直径約９ｍ、高さ2.93ｍの墳丘が明瞭となったが、石室発掘時に外されたと思われる石材が墳丘上に散乱しており、墳丘規模は本来さらに大きなものであったと思われる。

（２）　墳丘（図５・６）

墳丘は、北端で標高436.9ｍ、南端で標高435.6ｍであり、北から南にかけて約10°の傾斜を持つ斜面上に築かれている。墳丘形態は円墳であるが、検出した規模は、東西10.44ｍ、南北９ｍである。高さは、残存する墳丘で墳丘南裾部から1.4ｍ、北裾部から0.3ｍである。墳丘には奥壁と両側壁の背部に、石室の主軸及びそれに直交する３カ所のトレンチを設定した。墳丘の周囲には周溝はなく、また、墳丘自体が自然地形を利用したものでもなく、墳丘の盛土は主体部墓坑の排土や周囲の土や石をかき集めるようにして行ったと思われる。現状の墳丘は、地形が斜面であるため、地形に応じて第II層上に0.50ｍ～0.86ｍの盛土を確認した。盛土には、黒褐色粘質シルトや暗褐色粘質シルトを用いているが、主体部墓坑の裏込めには、褐色粘質シルトや暗褐色粘質シルトを用いている。墳丘の裾には、人頭大もしくはそれよりも大きな石が一部で認められたが、墳丘解体によりそれらは第II層や第IV層中に含まれるものや、盛土内に混入したものであり、外護列石と考えられるものはなかった。なお、墳丘構築にあたって整地を行った形跡は確認できなかった。

墳丘の築造過程は、主体部墓坑内の裏込めを行った後、側壁の積み上げに伴って10cm～20cmの厚さで盛土を行っている。最終的には、天井石を掛けた後の盛土で墳丘の築造を終えたものと思われる。

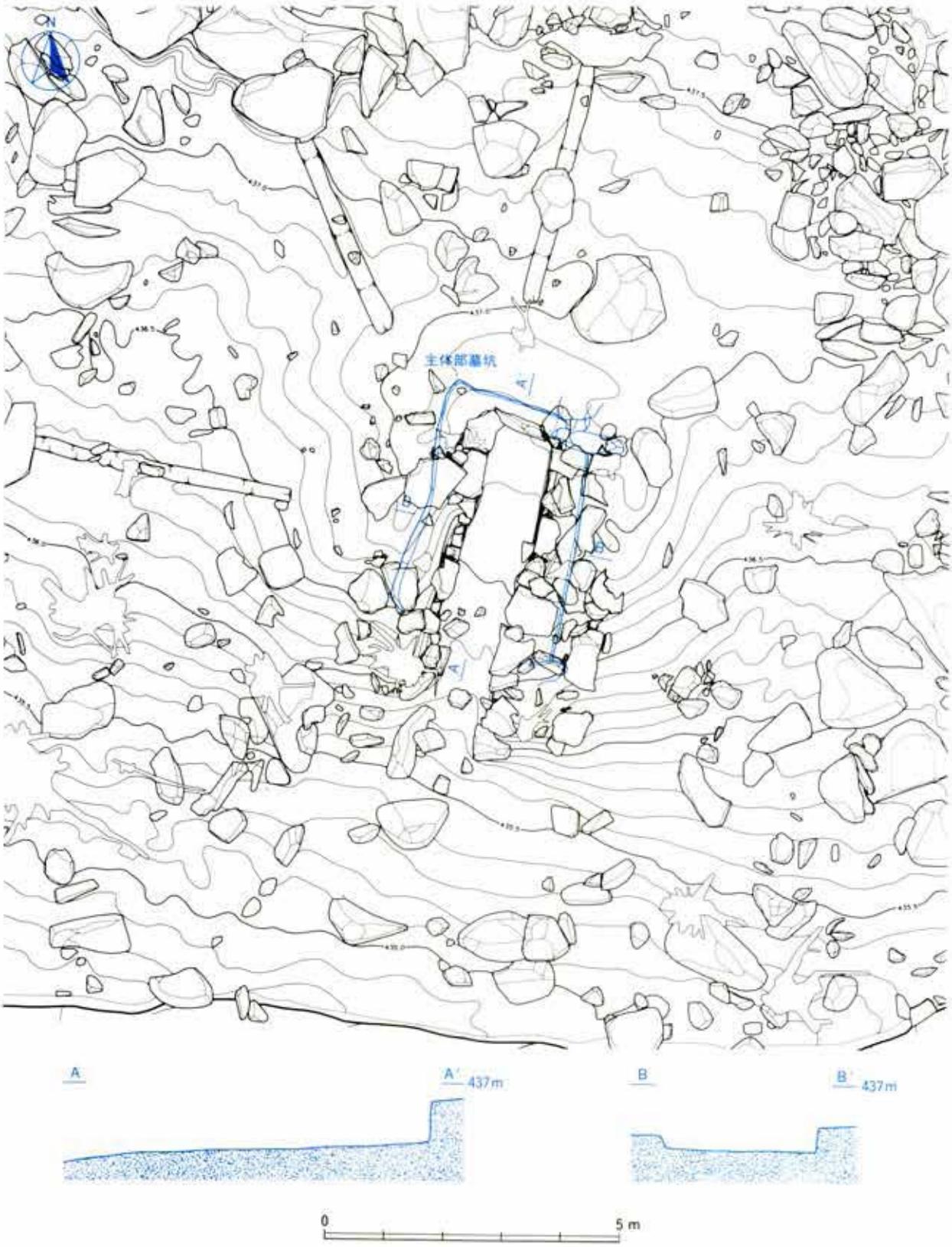


図5　墳丘平面図及び主体部墓坑実測図（S＝1/100）

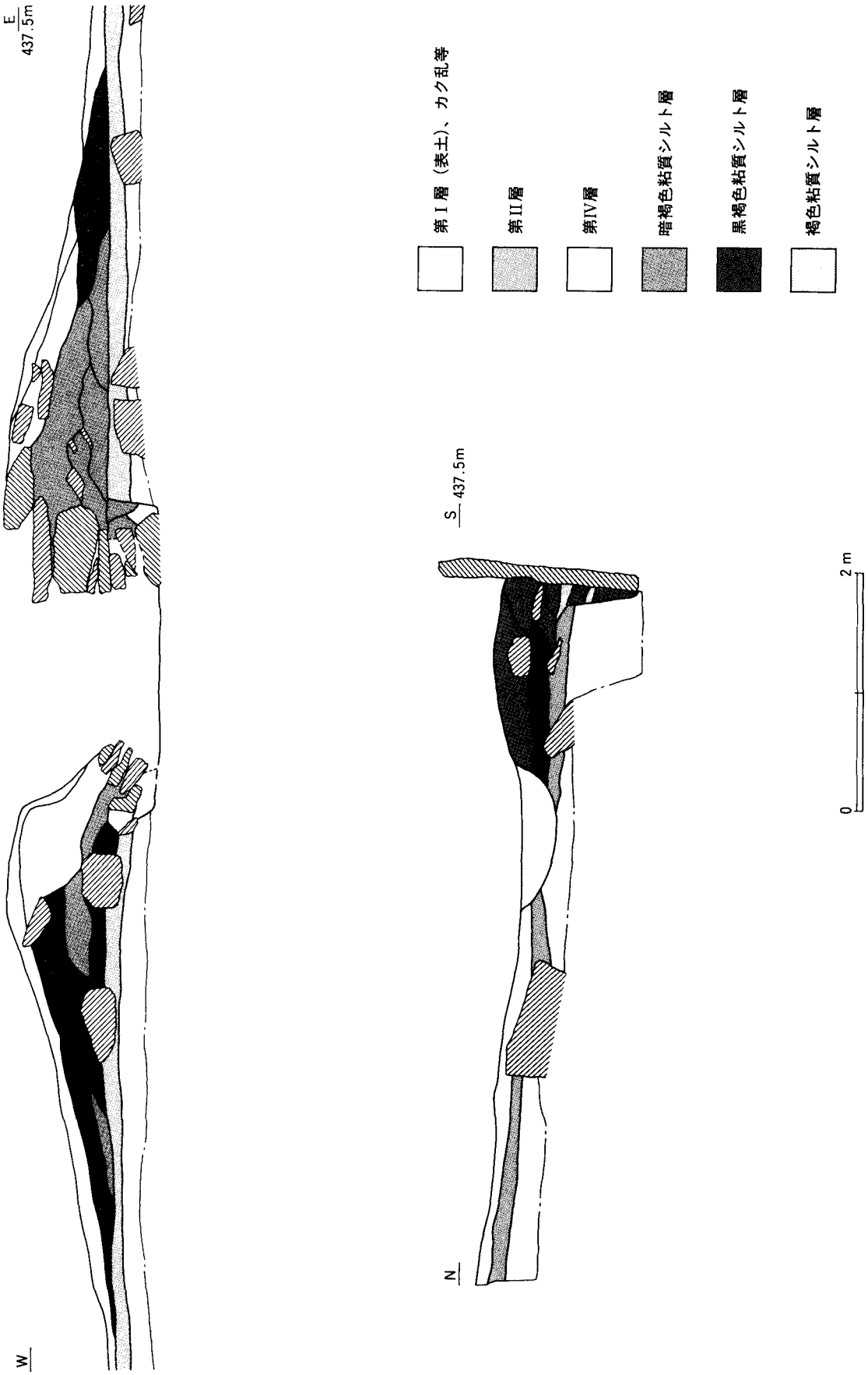


図６　墳丘断面図（S＝1/50）

（３）　主体部（図７）

主体部は、主軸方向をN-13°Eにとり、南に開口した無袖横穴式石室であるが、天井石は既に残存していなかった。側壁は最大で７段残存していたが、西側壁については石室内部に崩れかかっていた。石室内部は以前の発掘により敷石も外された状態で、遺物は縄文時代のものと思われる石器が１点出土しただけである。

主体部の墓坑（図５）は、斜面に直交する方向に第II層上面から掘り込まれており、底面がほぼ水平になるため南辺には明確な掘り込みはなく、南側は開口した状態となる。規模は長さ4.0m、幅2.66m、北辺での最大の深さ0.73mで、平面形がほぼ長方形である。主体部墓坑の南端は、玄室と羨道部との境にほぼ一致しており、主体部墓坑の規模や形態が、側壁の石材の積み方を規制していると思われる。なお、墓坑を掘り下げることによって露出した、第IV層中に含まれる岩は、奥壁や側壁の基底部の一部として利用されている。

石室の規模は、床面主軸上で長さ5.08mあり、奥壁から3.3mの位置で開口部に向かって幅を狭めていくことから、ここで玄室と羨道部に分けることができる。玄室の床面形態に胴張りはなく、ほぼ縦長の長方形を呈するが、玄室の幅は奥壁近くで1.32m、羨道部近くで1.58mあり、奥壁から徐々に幅を広げる形態となる。石室の高さは、天井石及び床面が取り除かれているため、正確には不明であるが、唯一残存していた敷石から床面の高さを推定した場合に、奥壁の最も高いところまで約1.6m、羨道部では東側壁の最も高く残るところで約１mであった。床面には、西側壁基底部に接して敷石が１つ残されていただけで、他は既に掘り下げられていた。石室に用いられている石材の鑑定は行わなかったが、そのほとんどは上野玄武岩と思われる。なお、床面において排水溝と思われる施設を検出することはできなかった。

奥壁は、長さ1.67m、幅1.28mの大型石材を１枚ほぼ垂直に立てて用い、東側壁との間に６段の石積みを行っているが、基底部には墓坑を掘り下げた際に露出した石をそのまま利用している。奥壁と両側壁による隅角は、西側では明瞭であるが、東側では奥壁４段目以上で側壁からの渡しかけが認められ、丸みを持たせている。西側壁面は奥壁へ入り込むが、東側壁面では奥壁と突き合わせた状態となる。

両側壁は横目地が数本通り、石材を７段以上積み上げて構築しているが、下半では横目地が入り口に向かって下がっており、上半では水平を意識しているようである。石材の積み方は、玄室部では基底部から２段～４段目までを長手積み、それ以上を小口積みにする傾向が認められるが、これは主体部墓坑の深さに概ね対応している。主体部墓坑の内部では、石材を置くスペースの制約があるため石材の大きさから長手積みを行う必要がある。しかし、主体部墓坑よりも上に積み上げていく際には、小口積みをして持ち送りを行っていると考えられる。また、主体部墓坑よりも外側になる羨道部では、基底部から小口積みを行っている。東側壁での壁面の傾斜角度は、玄室中央部で約77°、羨道部近くで68°である。なお、側壁において玄室と羨道部との境は不明瞭である。

羨道部は、開口部の基底石から玄室との境までの長さが約1.5mで、幅は玄室との境で1.54mであるのに対して、開口部では1.16mと狭くなっていく平面形である。側壁は最大で６段残っているが、開口部に向かって高さを減じていると思われる。床面には閉塞石と思われる石が残存していたが、遺物は出土しなかった。

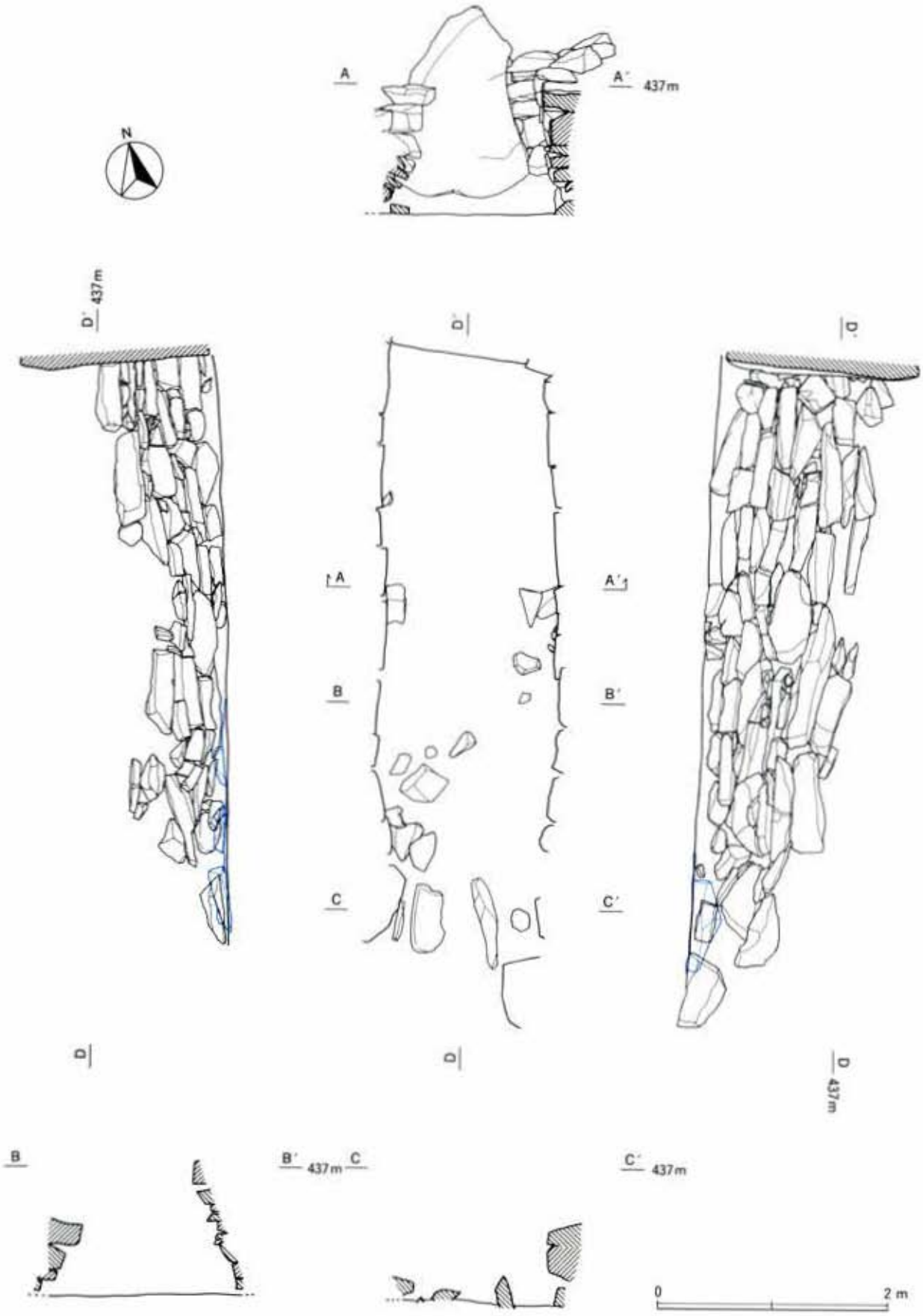


図7　石室実測図（S＝1/50）

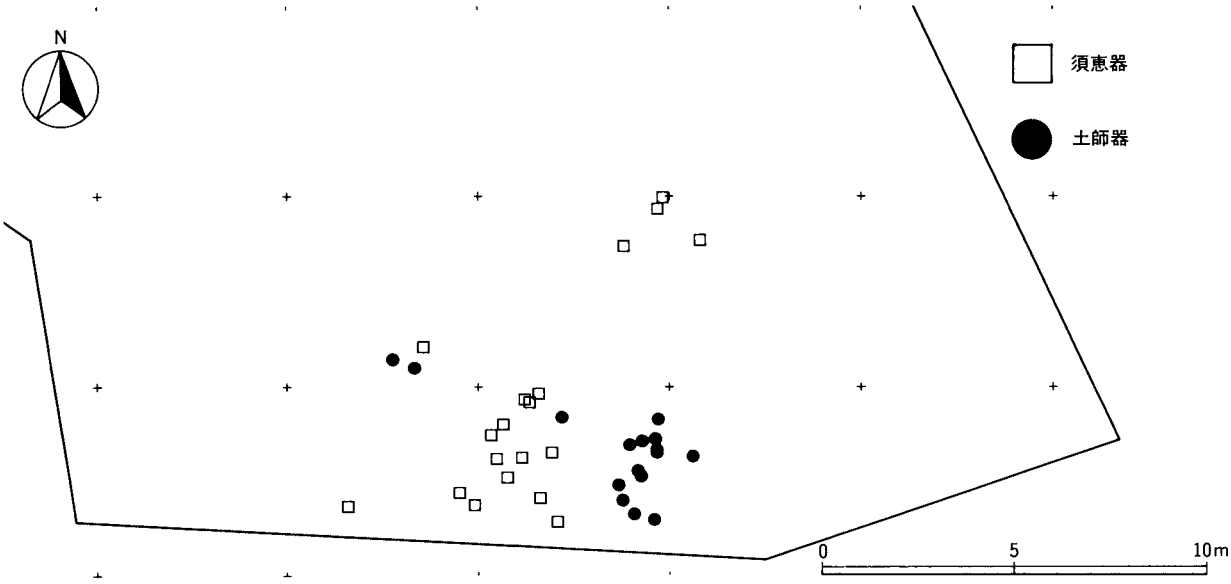


図8　土師器・須恵器出土位置（S＝1/200）

（4）　遺物

今回の調査では、石室内から古墳に伴う遺物は出土していないが、戦後の発掘時に土師器（1・4）、須恵器（5）、直刀（13）が出土しており、この時の石室掘削土を墳丘の周囲に捨てた[1]ということや今回の調査で出土した土師器片が甕（1）に接合したことから、今回の調査において墳丘周囲から出

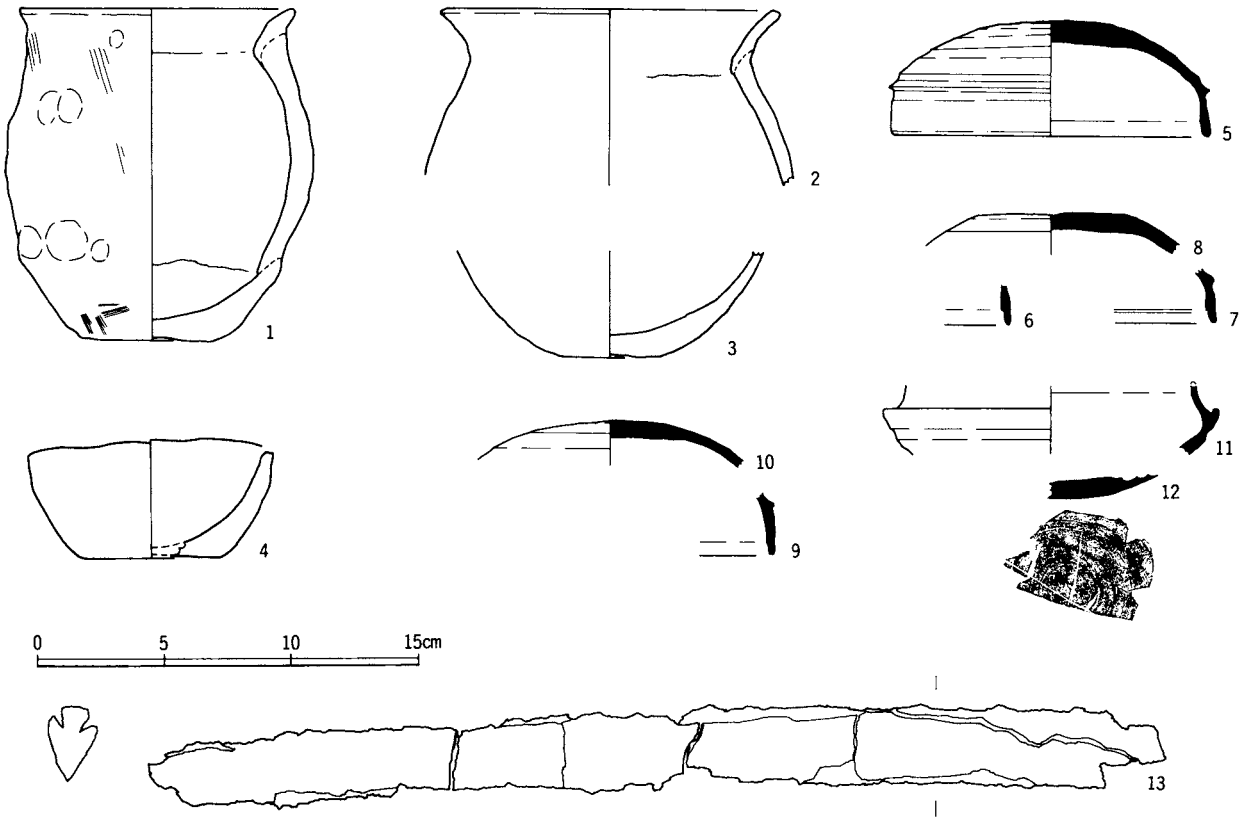


図9　ホヤノ木古墳出土遺物実測図（S＝1/3）

土した（図7）土師器（2・3）、須恵器（6～12）については石室内にあったものである可能性が高いと思われる。なお、図示したものの他にも土師器甕の体部片や須恵器蓋坏片がある。

土師器（図9－1～4）

1は甕であるが、奥壁と西側壁の隅から出土したと言われる[2]。口径10.6cm、器高13.0cmと小型で、底部は平底となるが、中央がやや凹む。口縁部は短く外反しており、頸部が肥厚する。体部の張りは弱く、内面下半には粘土接合痕が明瞭に残る。器面には煤や炭化物の付着は認められなかった。2は甕であるが、口径12.8cmで小型のものである。口縁部は外反するが、1のように頸部の肥厚はなく、器壁も薄い。外面に煤が付着している。3は甕の底部片と思われるが、胎土や色調から2と同一個体の可能性が考えられる。直径4cmほどの平底で、底部はやや凹んでいる。4は鉢であるが、甕の底部形態によく似ている。口縁部がやや内湾し、底部は平底であるが、わずかに凹む。

須恵器（図9－5～12）

5～10は坏蓋である。5は口径12.2cm、器高4.4cm、天井部は丸みを持ち、天井部外面は2/3程度をヘラケズリ調整する。口縁部と天井部との境には突線状の稜を作り出し、口縁部内面が浅く凹む。6は口縁部片であるが、内面が凹み、段をなす。7は口縁部片で、天井部との境には突線状の稜を作り出し、内面には細い沈線が巡る。8は胎土や焼成が7と類似しており天井部片として図示したが、形態からは坏身底部片の可能性が高い。9は口縁部片で、天井部との境には鋭い突線状の稜を作り出し、内面が浅く凹む。10は胎土や焼成から9と同一個体と思われる天井部片である。11は坏身片で、口縁端部と底部を欠く。口縁部は内傾して立ち上がり、内面が浅く凹線状に巡る。また、受け部の下にも凹線が巡る。12は胎土や焼成から11と同一個体と思われる底部片で、外面にヘラ記号が記されている。

鉄製品（図9－13）

13は直刀であるが1/3以上を欠くと思われる。錆の進行が著しく、割れや罅が激しくなっており、本来の形状をかなり損なってしまっている。玄室の東側壁近くから出土したと言われている[3]。残存する長さは39.8cm、幅4.2cm、厚さ1.9cmである。

1）原寛氏が発掘に参加した住民から聞き取り調査した結果についてご教示を受けた。

2）1）に同じ。

3）1）に同じ。なお、坂下町史には写真が掲載されている。

第3節　縄文時代の遺構と遺物

（1）　遺構

第Ⅳ層の上面で5基の土坑を検出したが、いずれの土坑からも遺物は出土していない。第Ⅱ層上面では確認できなかったことから、一応縄文時代の遺構と考えたい。

土坑1

E2区第Ⅳ層上面で検出したが一部調査区外になる。検出部での規模は、1.24m×0.65mの細長い土坑で、深さ0.16mである。埋土は1層（10YR3/4、暗褐色粘質シルト）で炭化物が若干混入していた。

土坑2

E3～E4区第Ⅳ層上面で検出した、0.99m×0.62mの小判形の土坑で、深さ0.20mである。埋土は2

層に分かれるが、上層には炭化物が多く混入していた。

土坑３

G6区第IV層上面の岩の間で検出したが、0.85ｍ×0.54ｍの不定形の土坑で、深さ0.29ｍである。埋土は１層（7.5YR3/3、暗褐色粘質シルト）で炭化物が混入していた。

土坑４

B6～C6区第IV層上面で検出した、1.14ｍ×0.54ｍの不定形の土坑で、深さ0.45ｍである。埋土は１層（10YR2/2、黒褐色シルト）であった。

土坑５

D7区墳丘解体後の第IV層上面で検出した、1.19ｍ×0.91ｍの楕円形の土坑で、深さ0.55ｍである。埋土は１層（7.5YR3/2、黒褐色粘質シルト）であった。

（２）　遺物

第II層から出土した遺物には、縄文土器５点、打製石斧７点、石鏃２点があり、石室内の撹乱層からは剥片石器が１点出土している。出土位置については図11に示した。他に打製石斧から剥離したと思われる破片や剥片が出土したが、これらは図示しなかった。また、縄文土器についても図示したのは３点である。

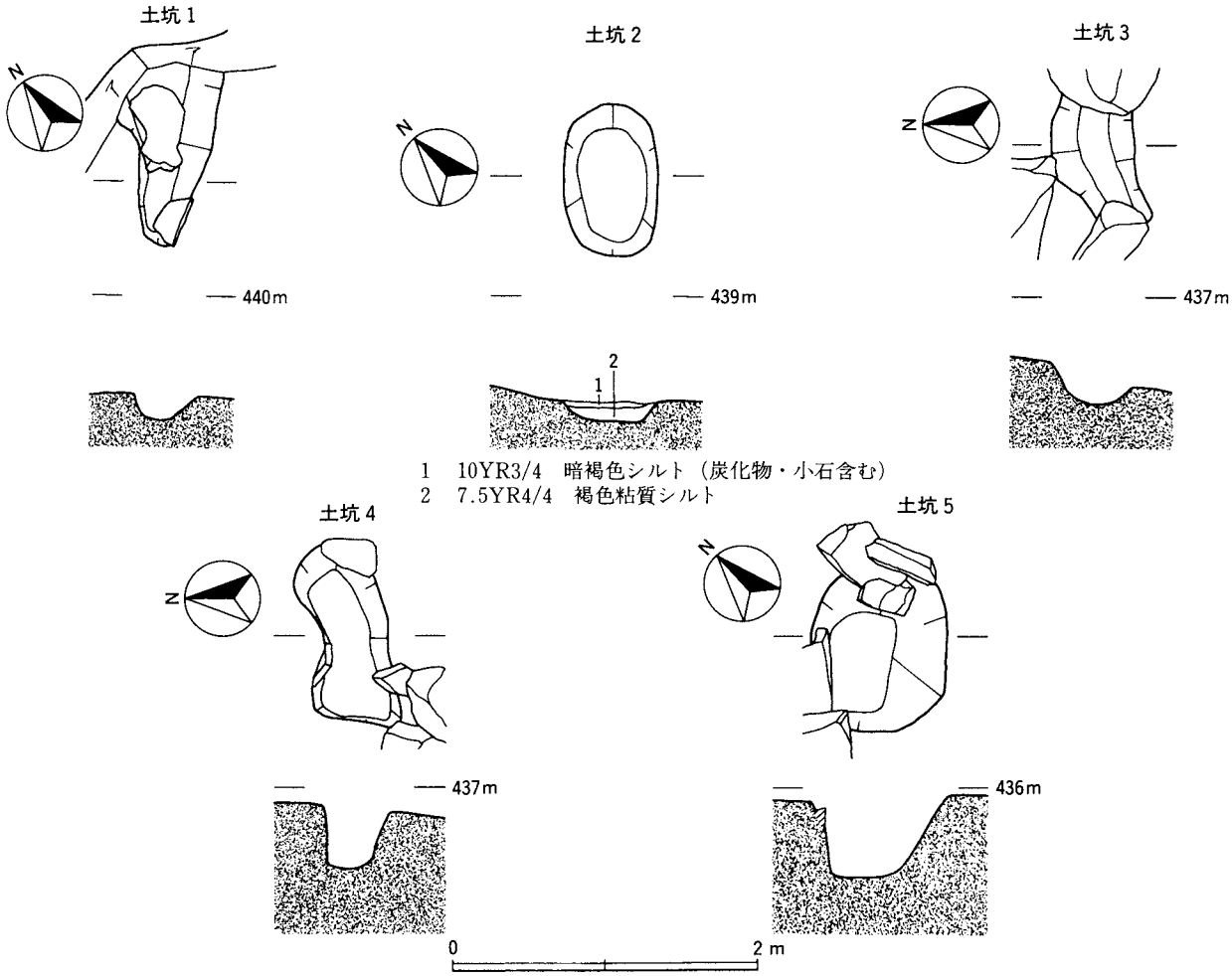


図10　土坑実測図（S＝1/50）

縄文土器（図12—14～16）

14は波状口縁となる深鉢の口縁部片で、口縁部が内湾する。波頂部に渦文を描きその下にも沈線が認められるが、全体の文様構成は不明である。器面はナデ調整され、地文はない。15・16は胎土や色調から同一個体と思われるものであるが、深鉢の胴部片である。どちらの破片にも垂下する2本の沈線が施されているが、2本単位となるのかどうか不明である。器面はナデ調整され、地文はない。いずれも中期末のものと思われる。

打製石斧（図14—17～23）

出土した打製石斧7点のうち、ほぼ完形品と思われるのが5点である。形状はすべていわゆる短冊形といわれるものであるが、刃部の幅が頭部の幅よりもやや大きい。図13に打製

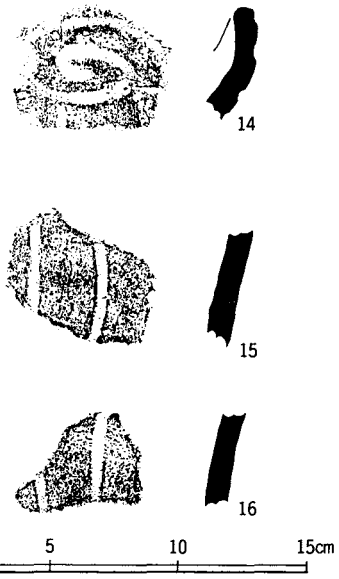


図12　縄文土器実測図（S＝1/3）

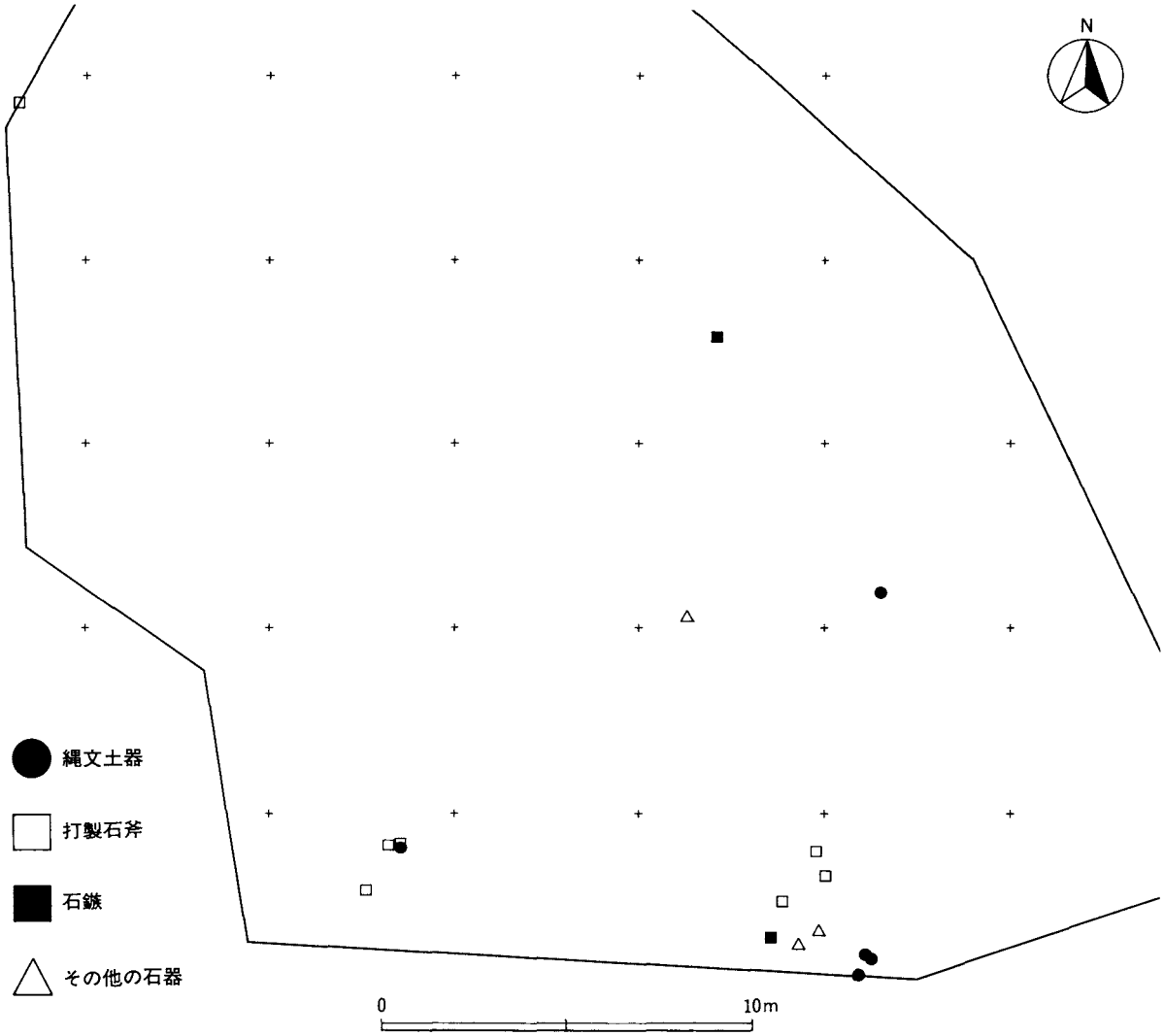


図11　縄文時代の遺物出土位置（S＝1/200）

石斧の計測値による法量分布図を示したが、最大のものは20の長さ18.1cm、幅5.2cm、質量209.8ｇである。他のものは長さ11cm前後、幅４cm前後、質量50ｇ～130ｇであり、出土量は少ないがこれが当遺跡での一般的な打製石斧の大きさといえる。また、肉眼観察では23を除いて刃部に使用の際に生じた摩耗痕が確認でき、17は摩耗痕が一方の側辺に片寄っている。刃部の摩耗痕の範囲については、スクリーントーンにより示した。21については裏面の頭部近くにも摩耗痕が認められ、柄に装着した痕跡と考えられる。なお、21・22は表面に研磨面があり、磨製石斧の破損品を転用したものと思われる。石材はすべて結晶片岩であった。

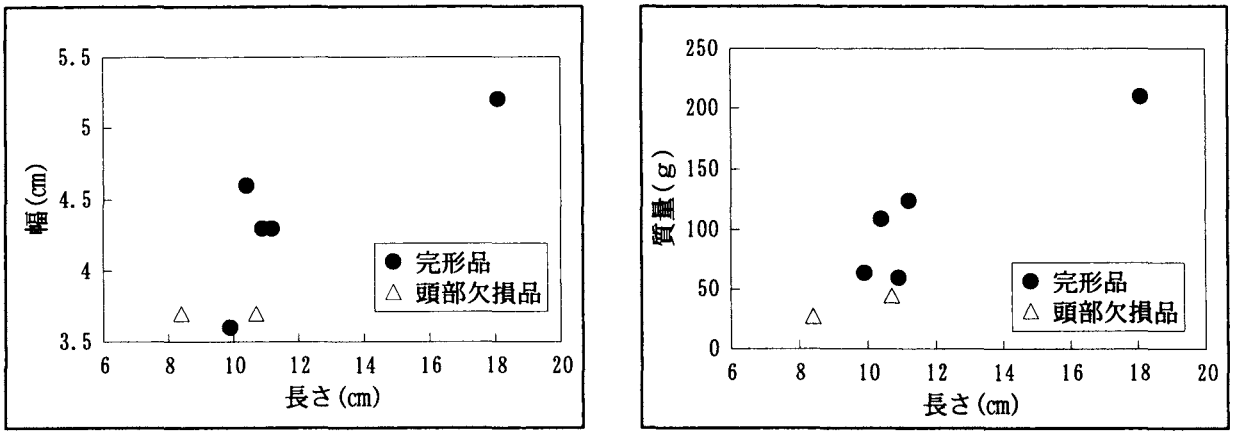


図13　打製石斧法量分布図

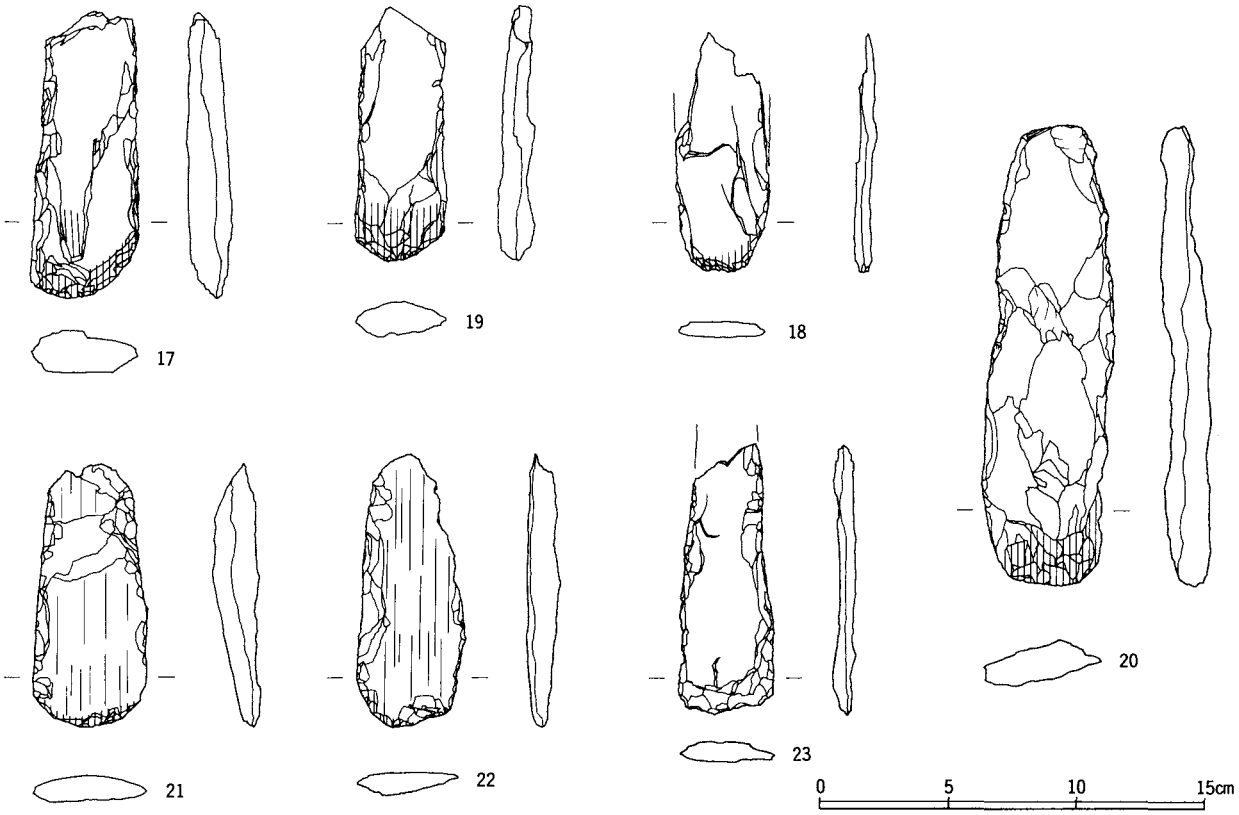


図14　打製石斧実測図（Ｓ＝１/3）

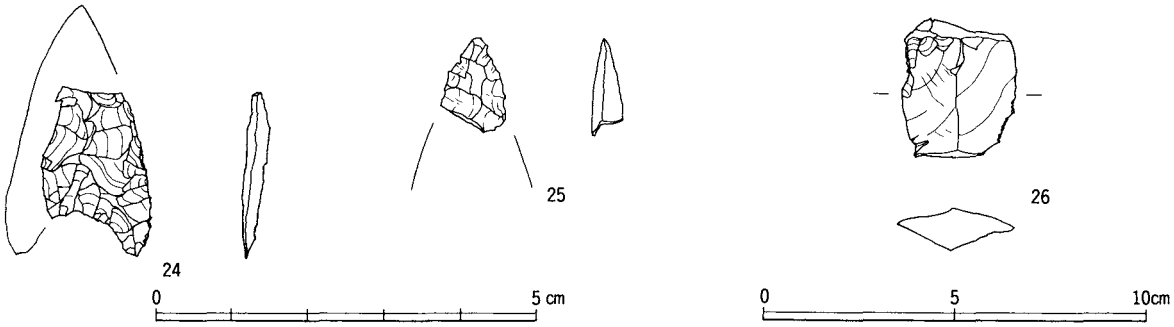


図15　石鏃・剥片石器実測図（石鏃S＝1／1　剥片石器S＝1／2）

石鏃（図15―24・25）

石鏃は2点出土したが、いずれも破損品で、黒曜石製と安山岩製のものである。24は先端から一方の側縁を欠くが、基部に抉りがあり、側縁はやや湾曲する。25は先端部片である。

剥片石器（図15―26）

微細な剥離痕を有する剥片で、石材は玉髄である。側縁に使用によるものと思われる微細な剥離痕が認められる。

第4節　参　考　資　料

ホヤノ木古墳と同じ丘陵上に位置する氷坂古墳群の中で、3基の古墳は横穴式石室を持ち、発掘調査等により遺物が出土している。これらの古墳をホヤノ木古墳と比較する資料として、それぞれの古墳の築造年代を推定しやすい須恵器蓋坏を中心に紹介する[1]。

氷坂1号古墳（図16―27～35）

ホヤノ木古墳から直線距離で1.5km北西に位置する。大正末期に開墾中に発見された古墳で、現在は側壁の一部が残るだけである。町史には石室内部から出土したものとして、須恵器が蓋坏2対、坏5、碗1の記載があるが、現在町に保管されている資料は、坏蓋2（27・28）、坏身6（29～34）、高台付坏身1（35）であった。須恵器の他に直刀2、銅環1、人骨片が出土したとされるが、詳しい出土状況は不明であり、一部の遺物については紛失している。

27は尾張系[2]と思われる坏蓋で、口縁部内面の凹線は消失しているが、天井部と口縁部との境に突線状の稜を持つ。28は尾張系と思われる坏蓋で、口縁部内面が浅く凹線状をなし、天井部と口縁部との境に突線状の稜を持つ。27よりもやや小振りである。29・30は尾張系と思われる坏身で、内傾する立ち上がりは長く、29では口縁部内面が凹線状に凹む。31・32は非尾張系[3]と思われる坏身で、内傾する立ち上がりは短く、尾張系と思われる坏身よりも器壁は厚い。33・34は尾張系と思われる坏身であるが、29・30よりも小振りで、内傾する立ち上がりは長く、33では口縁部内面が凹線状に凹む。35は高台を持つ坏身であるが、口縁部はあまり開かず深くなっている。底部が高台下端面よりも下へ張り出している。

氷坂3号古墳（図16―36～38）

1号古墳の南、ホヤノ木古墳から直線距離で1.3km北西に位置する。1958年に町史編纂に関連して発

掘調査が行われた。調査で出土した須恵器は、坏身2（36･37）、無蓋高坏1（38）であるが、坏身は玄室中央部、高坏は奥壁東隅から出土した。他に鉄鏃2、刀子1、金環1、勾玉1が玄室内から出土している。

36・37は非尾張系と思われる坏身であるが、36の立ち上がりはやや長い。また、38の底部には丸みがなく平坦である。38は無蓋高坏で、口縁部が立ち上がり、体部に沈線を巡らせて突帯状の段を2段持つ。段の間には櫛状工具による列点文を施す。脚中央部には2本の沈線を施し、2段3方向に透かしを入れる。

氷坂5号古墳（図16―39～49）

1号古墳の北約0.5kmに位置する。1962年に発掘調査されたが、遺物の出土状況から追葬が行われたとされている。調査で出土した須恵器は、1次埋葬時のものに坏蓋3（39～41）、坏身2（42・43）、2次埋葬時のものに坏蓋3（44～46）、坏身2（47・48）、長頸壺1（49）がある。1次埋葬とされた遺物は、東側壁の一隅にまとめられた状態で出土し、2次埋葬とされた遺物は西側壁から中央部にかけて出土している。他に直刀1、刀子、鉄鏃、人骨片が出土している。

39～41は尾張系と思われる坏蓋で、天井部と口縁部との境に突線状の稜を持つ。39と40の口縁部内面には凹線状の凹みがあるが、41にはなく口縁端部が外反する。42・43は尾張系と思われる坏身で、内傾する立ち上がりは長く、42の口縁部内面には凹線状の凹みがあり、43の口縁部内面には沈線が巡る。40と42、41と43がそれぞれセットとなる。44～46は尾張系と思われる坏蓋であるが、39～41よりも小振りで、天井部と口縁部との境には突線状の稜を持つ。44・45は口縁部内面が凹線状に凹み、46の口縁端部は内傾する面を持つ。47・48は尾張系と思われる坏身であるが、42・43よりも小振りである。内傾する立ち上がりは長く、47の口縁部内面には凹線状の凹みがあり、48の口縁部内面は面を持つ。44と47、45と48がそれぞれセットとなる。49は長頸壺であるが、肩部に沈線と櫛状工具による列点文を施す。

この他に調査された横穴式石室を持つ古墳としては、椛の湖2号古墳がある。昭和26年に椛の湖築堤工事に伴って、昭和33年には町史編纂事業の一環として発掘調査が行われている。また、昭和26年の調査後には工事関係者により直刀などが採集され、多くの副葬品が伴うものであったことが判明している[4]。出土した須恵器は提瓶で、編年対比が難しく図示しなかった。しかし、この古墳からは直刀が5口出土し、他にも刀子や鉄鏃などが伴っている。また、奥壁近くには馬具か短甲らしき錆びた筒状の鉄製品があったらしい[5]。なお、出土した直刀はすべてが刃を玄室内部(棺側)に向けられており[6]注目される。椛の湖2号古墳は、町内では最も北に位置する古墳であるが、出土した遺物は町内の他の古墳と比較して、鉄製品の内容が豊富であることが特徴的である。

1）3号古墳と5号古墳については既に『坂下町史』(1963年坂下町）に遺物が紹介されているが、今回再実測を行った。出土状況については『坂下町史』による。

2）生産地については明らかでないが、形態的な特徴から尾張の窯から出土したものに近いことから「尾張系」とした。

3）「尾張系」ではないという判断から「非尾張系」とした。

4）坂下町1963『坂下町史』。

5）昭和26年に発掘調査を行った小川栄一氏から聞いたことであるが、現在では確認できないと原寛氏からご教示を受けた。

6）小川栄一氏がこのことを指摘していたと原寛氏からご教示を受けた。

氷坂1号古墳

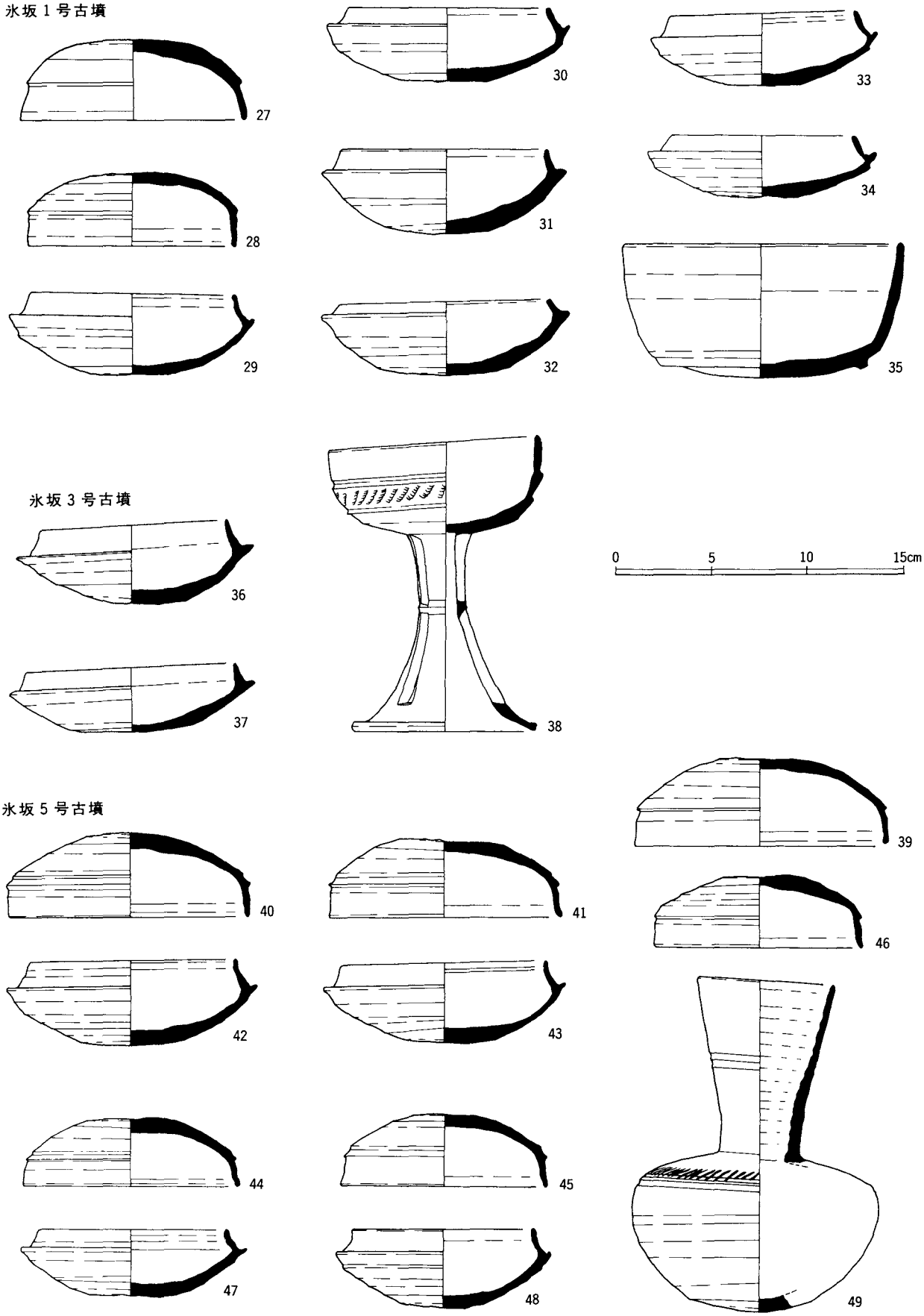


図16　参考資料（S＝1/3）

表１　土器観察表

No.	地区・遺構	層位	器種	調整	法量（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	挿図	図版
1	石室内		土師器甕	口縁部内外面、体部内面ナデ、体部外面ハケメ？後ナデ調整、体部外面に指頭圧痕残る	10.6	12.1	4.5	13.0	やや密、3mm以下の砂粒・石英粒・雲母片多く含む	良	暗灰色N3/0～にぶい黄橙色10YR6/3	炭化物の付着がない	9	10
2	C８	Ⅰ	土師器甕	口縁部及び体部内外面ナデ調整	12.8				やや密、2mm以下の砂粒・長石粒多く含む	やや良	にぶい黄橙色10YR6/4	口縁部外面に炭化物付着、３と同一個体か	9	11
3	D８	Ⅰ	土師器甕	底部内外面ナデ調整			4.0		やや密、2mm以下の砂粒・石英粒多く含む	やや良	にぶい黄橙色10YR6/4	底部やや突出、２と同一個体か	9	11
4	石室内		土師器鉢	口縁部内外面、体部外面ナデ、体部内面ハケメ後ナデ調整	9.1	4.6	5.4	4.4	やや密、3mm以下の砂粒多く含む	やや良	暗灰色N3/0～にぶい黄橙色10YR7/4	底部やや突出	9	10
5	石室内		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	12.2			4.4	密、2mm以下の砂粒・長石粒含む	良	青灰色10BG6/1～緑灰色7.5GY5/1	尾張系	9	10
6	D８	Ⅰ	須恵器坏蓋	口縁部内外面ロクロナデ調整					密、1mm以下の砂粒含む	やや良	灰白色7.5Y7/1	尾張系	9	11
7	D８	Ⅰ	須恵器坏蓋	口縁部内外面ロクロナデ調整					密、1mm以下の砂粒含む	やや良	灰白色10Y7/1	尾張系、8と同一個体か	9	11
8	D７	Ⅰ	須恵器坏蓋	天井部内面ロクロナデ、外面回転ヘラ削り調整					密、1mm以下の砂粒含む	やや良	灰白色10Y7/1	尾張系、7と同一個体か	9	11
9	D７	Ⅰ	須恵器坏蓋	口縁部内外面ロクロナデ調整					密、1mm以下の砂粒含む	良	灰白色10Y6/1	尾張系、10と同一個体か	9	11
10	E８	Ⅰ	須恵器坏蓋	天井部内面ロクロナデ、外面回転ヘラ削り調整					密、2mm以下の砂粒含む	良	灰白色10Y6/1	尾張系、9と同一個体か	9	11
11	D８	Ⅰ	須恵器坏身	口縁部内外面ロクロナデ調整		受部13.1			密、1mm以下の砂粒含む	良	灰色N3/0	尾張系、12と同一個体か	9	11
12	D８	Ⅰ	須恵器坏身	底部内面ロクロナデ、外面回転ヘラケズリ調整					密、1mm以下の砂粒含む	良	灰白色10Y7/1	尾張系、底部外面にヘラ記号、11と同一個体か	9	11
14	C８	Ⅱ	縄文土器深鉢	口縁部内外面ナデ調整、沈線文施す					やや粗、3mm以下の砂粒・長石粒多く含む	やや良	にぶい黄橙色10YR6/4～灰黄褐色10YR4/2	中期末	12	11
15	F８	Ⅱ	縄文土器深鉢	体部内外面ナデ調整、沈線文施す					やや粗、4mm以下の砂粒・長石粒多く含む	やや良	にぶい黄橙色10YR6/4～暗灰黄色2.5Y5/2	中期末	12	11
16	C８	Ⅱ	縄文土器深鉢	体部内外面ナデ調整、沈線文施す					やや粗、3mm以下の砂粒・長石粒多く含む	やや良	にぶい黄橙色10YR6/4～にぶい黄色2.5Y6/4	中期末	12	11
27	氷坂１号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	11.7			4.2	密、2mm以下の砂粒少量含む	やや不良	灰色N6/0	尾張系	16	-
28	氷坂１号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	10.8			3.8	密、3mm以下の砂粒含む	良	灰色N4/0	尾張系	16	-
29	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.6	受部12.9	4.1	4.3	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰色10Y4/1	尾張系	16	-
30	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.5	受部12.7	4.5	3.9	密、1mm以下の砂粒少量含む	良	灰色N4/0	尾張系、底部外面に自然釉付着	16	-
31	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.8	受部12.8	4.4	4.4	密、3mm以下の砂粒含む	良	灰色N4/0	非尾張系	16	-
32	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	11.0	受部13.0	4.2	3.9	密、3mm以下の砂粒多く含む	やや良	緑灰色7.5GY6/1	非尾張系	16	-
33	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	9.6	受部11.8	3.8	3.8	密、3mm以下の砂粒少量含む	やや良	灰色10Y5/1	尾張系	16	-
34	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	9.4	受部12.0	3.3	3.4	密、1mm以下の砂粒含む	良	暗灰色N3/0	尾張系	16	-
35	氷坂１号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	14.3		10.2	7.1	密、5mm以下の砂粒含む	やや不良	灰色10Y4/1～淡黄色2.5GY8/3	無蓋坏身	16	-
36	氷坂３号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	9.8	受部12.5	3.8	4.1	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰色N6/0	非尾張系	16	-
37	氷坂３号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	11.1	受部12.9	4.8	3.4	密、3mm以下の砂粒含む	良	灰色N6/0	非尾張系	16	-
38	氷坂３号古墳		須恵器高坏	坏部及び脚部内外面ロクロナデ調整	10.9		9.5	15.2	密、3mm以下の砂粒含む	良	灰色N7/0	透孔２段３方向	16	-
39	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	13.0			4.6	やや密、2mm以下の砂粒多く含む	やや良	灰色N6/0	尾張系	16	-
40	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	12.5			4.4	密、1mm以下の砂粒含む	良	灰色10Y6/1	尾張系	16	-
41	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	12.1			4.0	密、1mm以下の砂粒含む	良	灰色N5/0	尾張系	16	-
42	氷坂５号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.8	受部13.2	5.4	4.5	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰色N5/0	尾張系	16	-
43	氷坂５号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.7	受部12.7	2.7	4.2	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰白色5Y8/1～灰色N5/0	尾張系	16	-
44	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	11.2			3.6	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰色N4/0	尾張系	16	-
45	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	10.7			3.9	密、1mm以下の砂粒少量含む	良	青灰色5B5/1	尾張系	16	-
46	氷坂５号古墳		須恵器坏蓋	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ調整	10.7			3.7	密、2mm以下の砂粒含む	良	灰色N6/0	尾張系	16	-
47	氷坂５号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	9.9	受部11.9	3.5	3.5	密、1mm以下の砂粒含む	良	暗灰色N3/0	尾張系	16	-
48	氷坂５号古墳		須恵器坏身	口縁部内外面及び底部内面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	9.5	受部11.3	2.1	4.2	密、1mm以下の砂粒少量含む	良	青灰色5B6/1	尾張系	16	-
49	氷坂５号古墳		須恵器壺	口縁部及び体部内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラケズリ調整	10.0	12.8	丸底	17.5	密、3mm以下の砂粒含む	やや良	にぶい赤褐色5YR5/3～灰色N4/0		16	-

表２　石器観察表

No.	地区・遺構	層位	種類	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	質量（g）	石材	備考	挿図No.	図版No.
17	F８	Ⅱ	打製石斧	11.2	4.3	1.8	124.1	結晶片岩	使用により刃部摩耗	14	12
18	H４	Ⅱ	打製石斧	(8.4)	3.7	(0.9)	(27.0)	結晶片岩	使用により刃部摩耗、頭部欠損	14	12
19	F８	Ⅱ	打製石斧	9.9	3.6	1.4	63.8	結晶片岩	使用により刃部摩耗	14	12
20	D８	Ⅱ	打製石斧	18.1	5.2	1.8	209.8	結晶片岩	使用により刃部摩耗	14	12
21	C８	Ⅱ	打製石斧	10.4	4.6	1.8	109.0	結晶片岩	使用により刃部摩耗、磨製石斧の転用	14	12
22	F８	Ⅱ	打製石斧	10.9	4.3	1.3	59.8	結晶片岩	使用により刃部摩耗、磨製石斧の転用	14	12
23	D８	Ⅱ	打製石斧	(10.7)	3.7	0.8	(44.5)	結晶片岩	使用痕不明瞭、頭部欠損	14	12
24	D８	Ⅱ	石鏃	(2.2)	(1.4)	(0.3)	(0.9)	黒曜石	2/3欠損	15	11
25	D５	Ⅱ	石鏃	(1.2)	(0.9)	(0.4)	(0.3)	隠微晶質安山岩	先端部のみ	15	11
26	石室内	攪乱	剥片石器	3.7	3.1	1.1	11.0	玉髄	微細な使用痕あり	15	11

第4章　ま　と　め

1　ホヤノ木古墳の築造時期について

古墳の築造年代を推定する手がかりとしては、副葬された須恵器の型式編年による年代推定が、最も有効なものである。ホヤノ木古墳及び坂下町内の古墳から出土している須恵器は、尾張系(尾張型)といわれるものが多く、尾張の須恵器窯による既存の編年[1)]に対比させて、その築造時期を検討したい。

ホヤノ木古墳は、須恵器坏蓋（5）が口径及び形態からH―44号窯期に対比できるが、他の須恵器は小破片で法量がわかるものがない。氷坂1号古墳は、27や29、30がH―44号窯期、28や33、34がH―50号窯期に対比できる。尾張系の蓋坏からは2時期のものがあり、また、35はI―17号窯期に対比できることから追葬が行われていた可能性がある。氷坂3号古墳は、非尾張系の坏身しかないが、H―44号窯期にほぼ併行する時期のものと思われる。氷坂5号古墳は、調査により追葬が確認されているように、1次埋葬に伴う土器がH―44号窯期及びその前段階、2次埋葬に伴うものがH―50号窯期に対比できる。なお、この時期の尾張系の須恵器蓋坏は、新しくなるにつれて法量が小さくなる傾向があり、法量分布（図17）においても坏身・坏蓋ともに大きく2つのまとまりとして確認できる。

出土した須恵器から推定される、実年代についてはH―44号窯期が7世紀の前葉、H―50号窯期が7世紀の中頃である[2)]。坂下町内においては、石室を持たない直葬形態の古墳も確認されているが、横穴式石室をもつ古墳に限れば、6世紀中葉以前にさかのぼるものは現在のところ確認されていない。

1）斉藤孝正1989「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』愛知県考古学談話会、城ヶ谷和広1991「寺野遺跡の遺物について付．6世紀代の須恵器の編年」『考古学フォーラム』2、尾野善裕1997「尾張・西三河（窯跡）猿投・

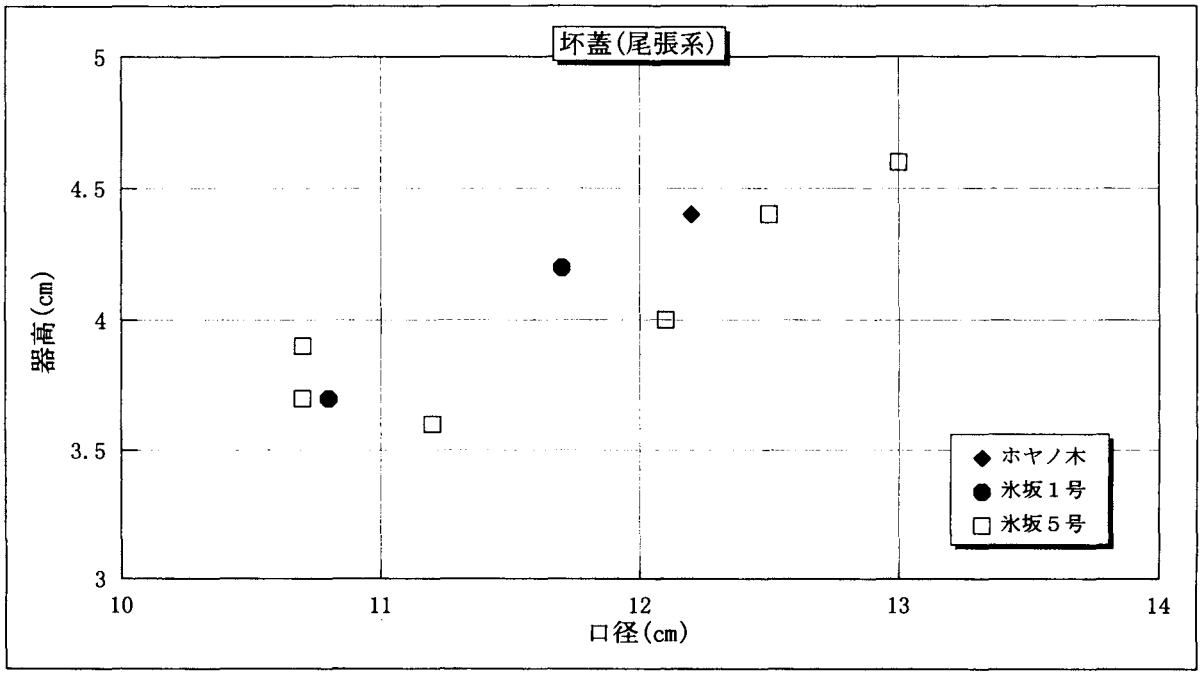


図17　坏蓋（尾張系）法量分布図

尾北・その他」『古代の土器５―17世紀の土器（近畿東部・東海編）』を参考にした。

2）斉藤孝正他1995『須恵器集成図録第３巻東日本編Ⅰ』所収の「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表（斉藤孝正作成）」を参考にした。

2　古墳の築造過程について

ホヤノ木古墳は、斜面上に築かれた円墳であるが、南北９ｍ、東西10.4ｍとやや楕円形に近い。規模については周溝が造られていなかったため、現存する墳丘盛土によるが、かなり流失しているものと思われる。調査の結果から推定される古墳の築造過程について、以下に記す。

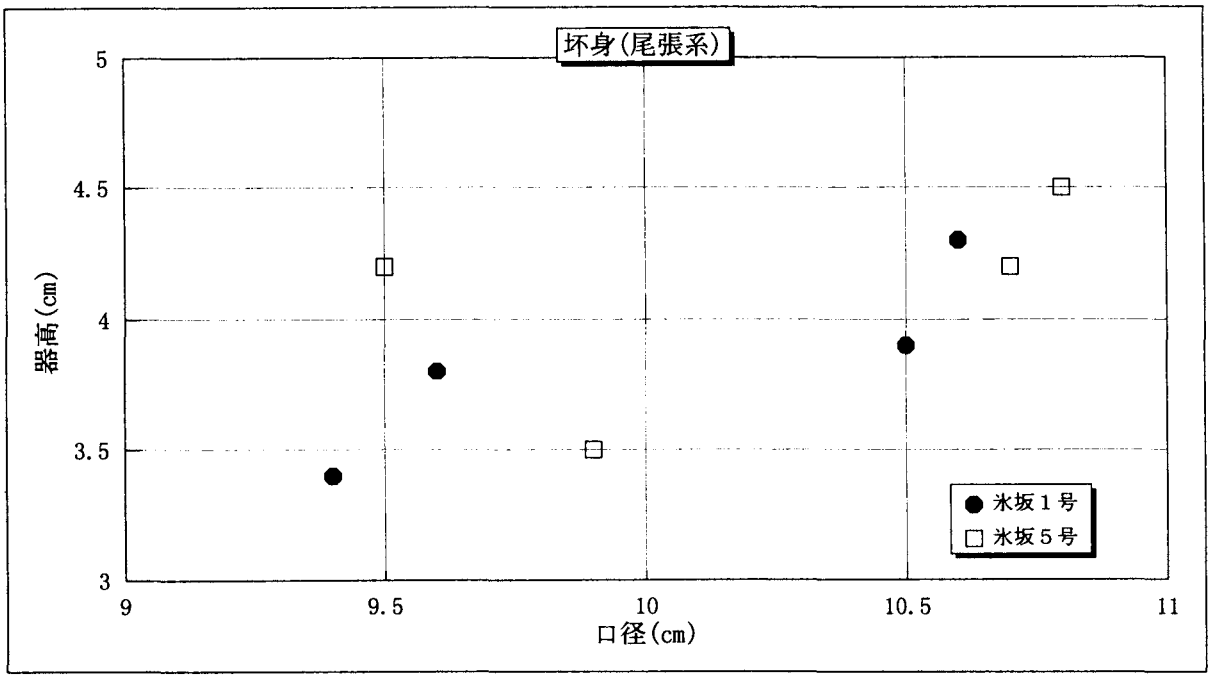


図18　坏身（尾張系）法量分布図

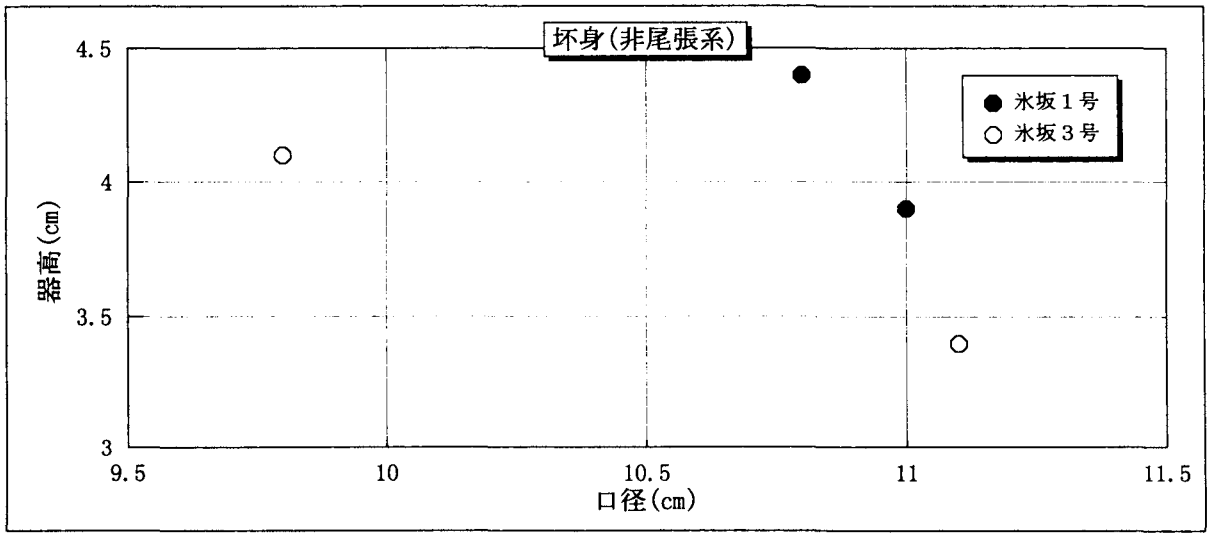


図19　坏身（非尾張系）法量分布図

① 主体部墓坑の掘削を行うが、当時の表土と思われる第II層上面から掘り込みを行っている。この際に排出される土は、主体部墓坑の裏込めや墳丘盛土に用いられる。

② 奥壁及び側壁の基底石を置き、裏込めを行うが、側壁の基底石は奥壁から2m前後までを1回目とし、それよりも入り口側の基底石は2回目以降に置かれたものと思われる。なお、羨道部の側壁については、主体部墓坑の裏込めを行った後置かれた可能性がある。

③ 主体部墓坑の深さまで石材を積み、裏込めを行った後、墳丘の盛土が開始される。

④ 石材は持ち送りを強くし、側壁の積み上げに伴って10cm～20cmの盛土を行うが、墳丘断面からこれを少なくとも3回以上行ったと思われる。この際に側壁の上端が水平になるように高さを調整している。

⑤ 最後に天井石を架設して、盛土を行った。

今回の調査で特に注目されることは、石室石材の積み方である。側壁に見られる横目地は、上半では水平を意識しているのに対し、下半では斜行している。これは、上半に小口積み、下半に長手積みを多用している[3]点（図20）と一致し、さらに主体部墓坑の深さにもほぼ対応している（図21）。古墳が築かれたのが斜面であること、主体部墓坑の内部では石材を置くスペースに制約があること、側壁上半では天井石を架設するため石材の持ち送りを行う必要があることなど古墳築造にあたってのいくつかの条件があり、古墳（石室）を築造するためにより良い方法を選択した結果と思われる[4]。隣接する地域では、石室内部あるいは墳丘の断面の調査を行った例はあるが、墳丘を解体し石材の積み方を確認した例がないため、他の石室を持つ古墳と単純に比較することはできないが、同様の制約を持ちながら最善の構築方法を選択していると思われる[5]。

石室床面の平面形態は、玄室が長方形で羨道部は入り口へ向かって狭くなるが、坂下町内に類似す

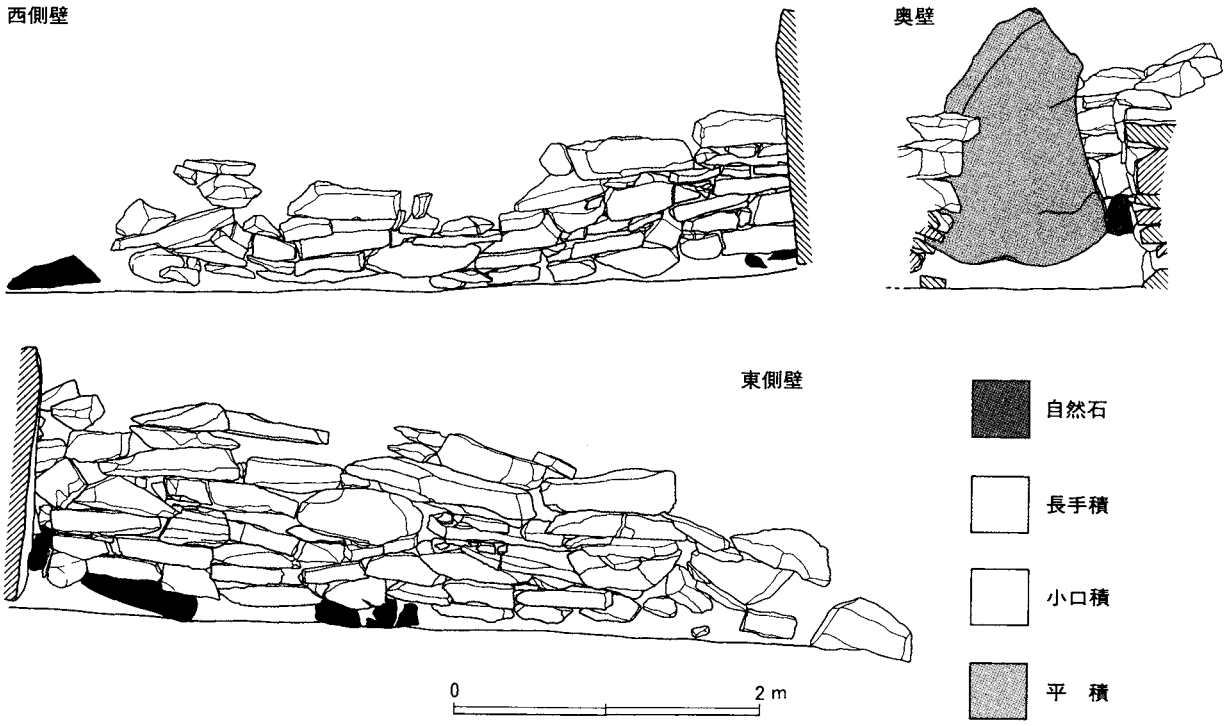


図20　石室の石積み方法

るものはない。しかし、近いところでは築造時期がやや古くなるものの恵那市千田26号墳が類似した平面形態となる。

なお、ホヤノ木古墳は、丘陵の尾根からわずかに西へ下がった斜面上に位置している。開口部側の斜面下には外洞川による狭い谷があるだけで、当時の活動拠点と思われる集落遺跡は反対側の斜面下となる[6]。視覚的効果を考えた場合、集落遺跡からは見えない場所をあえて選択している点に何らかの意図を考える必要があると思われるが、今後の検討すべき課題としたい。

3）側壁上半部に見られる長手積みの石材は、下半部の石材と比較してかなり大きなものを使用しており、小口積みにしなくても持ち送りが十分に行える石材と思われる。

4）あるいは、様々な制約に対する構築方法の約束事が存在したことも考えられる。

5）地域は異なるが、長良川流域に位置する美濃市塚穴２号墳は、石室の構築状況に類似性が認められる。この古墳は斜面に築かれ、石室側壁の横目地が入り口に向かって傾斜しており、石室の構築過程の復元において、側壁の構築状況が旧地表面に合わせるように行われていることが指摘されている。成瀬正勝他1993『塚穴古墳群発掘調査報告書』（美濃市文化財調査報告第７号）美濃市教育委員会。

6）氷坂３号古墳は丘陵尾根上の平坦地に造られているが、南を流れる外洞川に向かって開口している。

3　縄文時代の遺物について

今回の調査において、縄文時代の遺物が出土しているが、縄文土器や他の石器と比較して打製石斧の量が多い点に特徴が認められる。出土状況や遺物の遺存状態から単に２次堆積によるものとは考えにくく、遺跡の性格を検討する必要があると思われる。しかし、調査範囲が狭い上、明らかにこの時期と思われる遺構もなく、遺物自体も包含層からの出土であり、現状においてはあくまで推定の域を

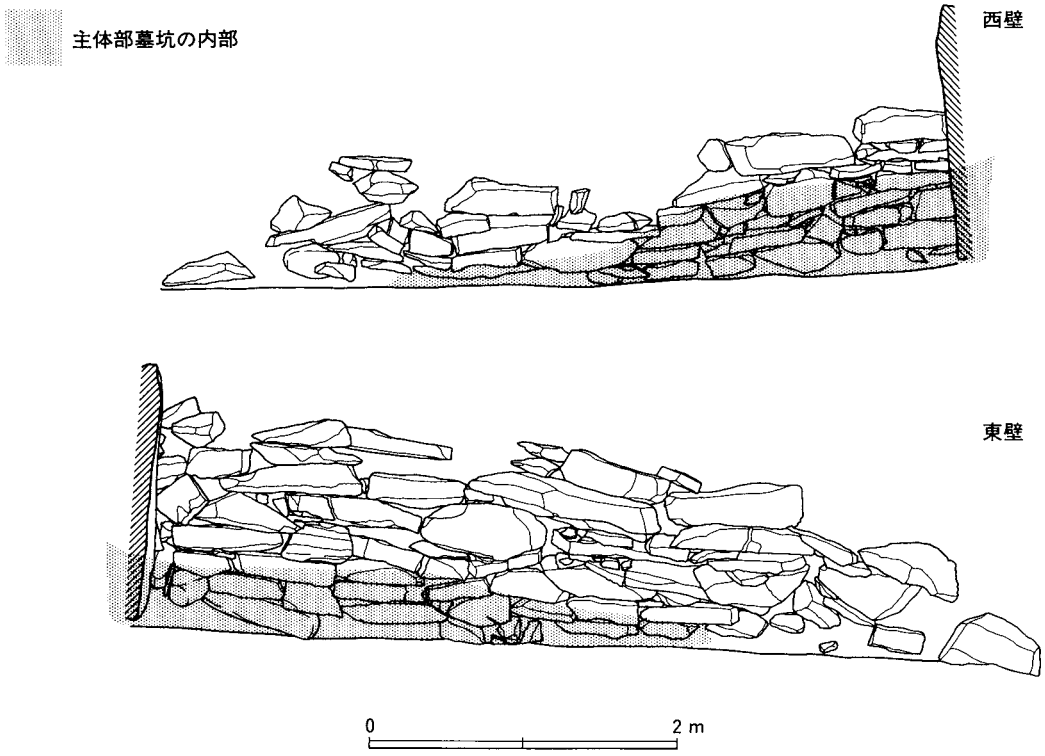


図21　側壁と主体部墓坑との関係

出るものではない。土器の出土量の少なさから集落域とは考えられず、祭祀に伴う遺物もない。また、打製石斧以外の石器の出土量も少ない。こうした中で打製石斧の出土量は、他の遺物と比較して多く、またそのほとんどに使用痕を観察することができる。さらに、打製石斧の未製品はなく、その剝片[7]も１点だけであったことから、打製石斧の製作跡ではなく、使用した場所であったことが推測できる。打製石斧は、根菜類を採集するための土掘り具として使用されたといわれるものであり、こうした状況からは、調査した場所が縄文時代における植物食料資源を獲得する場であったことが推測される。しかし、同様に植物食料を採集した場としての性格付けがなされた勝更白山神社周辺遺跡[8]においては、打製石斧（石製土掘具）の出土量は非常に多く850点を数える。

今回の調査場所が、植物食料資源を獲得する場であったと考えるには、打製石斧の出土量[9]だけではなく、裏付けとなる資料が必要と思われる。植物食料を獲得した場が遺跡となって残されていた場合、考えられる遺構は、根菜類を採集するために掘った穴であるが、検出した土坑がこうした穴であったことを結論付けるものがない。しかし、遺物量も少ないこうした遺跡を、安易に単なる遺物散布地とするのではなく、なぜそこにこうした遺物が存在していたのかを検討することは、発掘調査を行っていく上で重要であると思われる。

7）製作時のものであるのか使用によるものであるのか、剝片自体からは判断できなかった。

8）長屋幸二1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡―東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書―』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第22集）（財）岐阜県文化財保護センター。

9）調査では破損品は２点でほぼ完形のものが５点出土している。使用した場所に破損品が残される可能性は高いと想像できるが、生活の場から離れた場所に、まだ使用可能な道具を残していくことをどう理解するのか問題が残る。

4　おわりに

今回の調査によって、ホヤノ木古墳の構築状況が明らかとなり、また、縄文時代の遺物が出土したことから、当時の活動状況の一端を明らかにすることができた。特に東濃地域では数少ない墳丘解体を伴う調査を行うことができたことによって、従来不鮮明であった石室側壁における石材の積み方について理解を深めることができた点は重要である。しかし、木曽谷の入り口にあたる地域での古墳の状況については、まだまだ調査するべきところが多く残されている。さらに、縄文時代の遺物が出土することは、当初まったく念頭に置かれておらず、その解釈にとまどうところもあったが、植物食糧資源の獲得の場であった可能性を指摘することによって、今後の発掘調査に生かされることを願うものである。

参考文献

恵那市史編纂委員会　1980『恵那市史史料編考古・文化財』恵那市

内堀信雄・井川祥子　1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

岐阜市歴史博物館　1991『シンポジウム美濃の後期古墳～岐阜県考古学界の現状を探る～』

中津川市　1968『中津川市史通史』上巻

美濃古墳文化研究会　1992『美濃の後期古墳』

四日市市教育委員会　1992『青木川古墳群―農地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

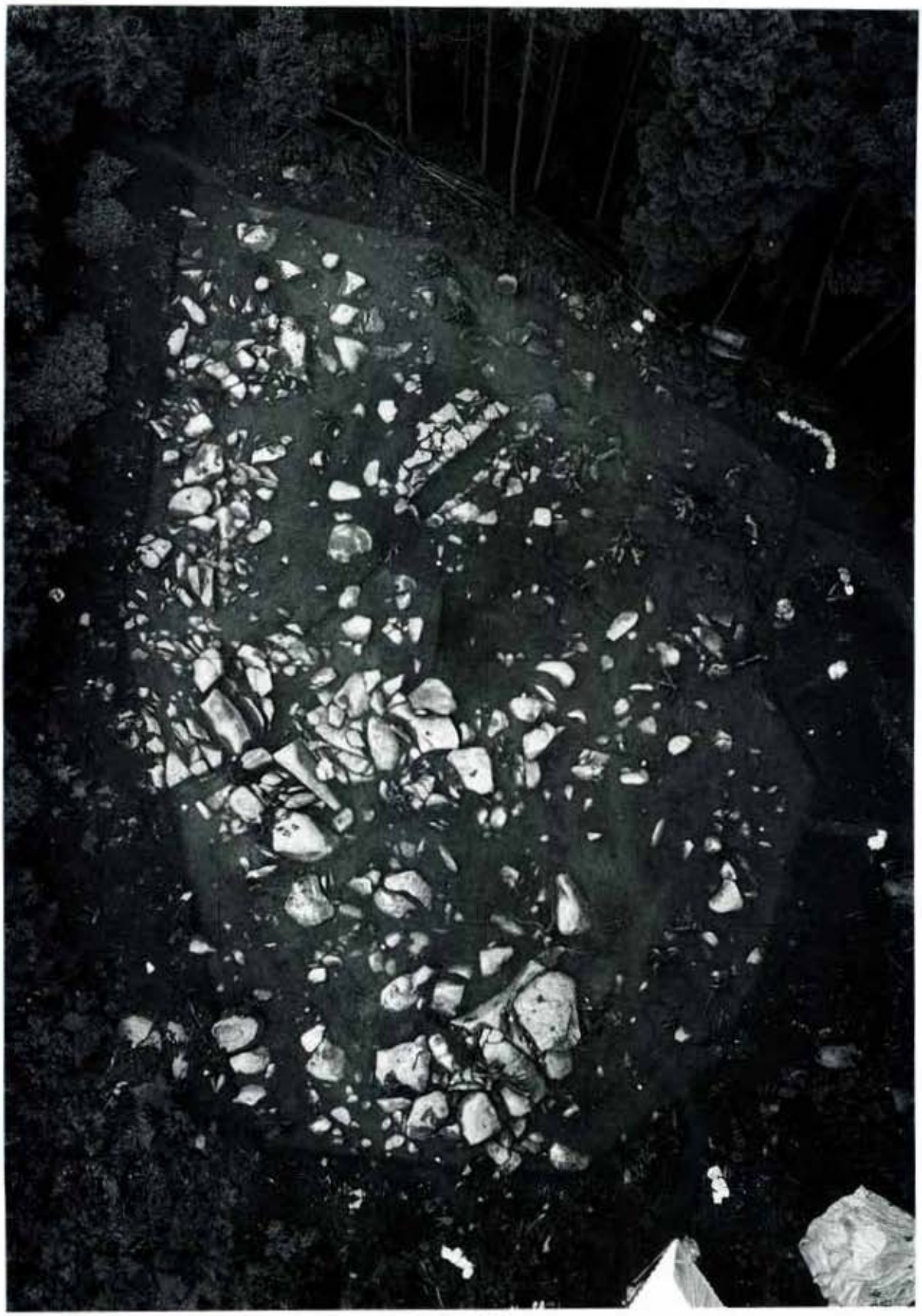
渡辺誠他　1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館

図　　版

空中写真（昭和52年国土地理院撮影）

ホヤノ木古墳遠景

図版 2



調査区全景

調査区近景（表土除去後）

調査前のホヤノ木古墳

石室内清掃後

石室内表土除去後

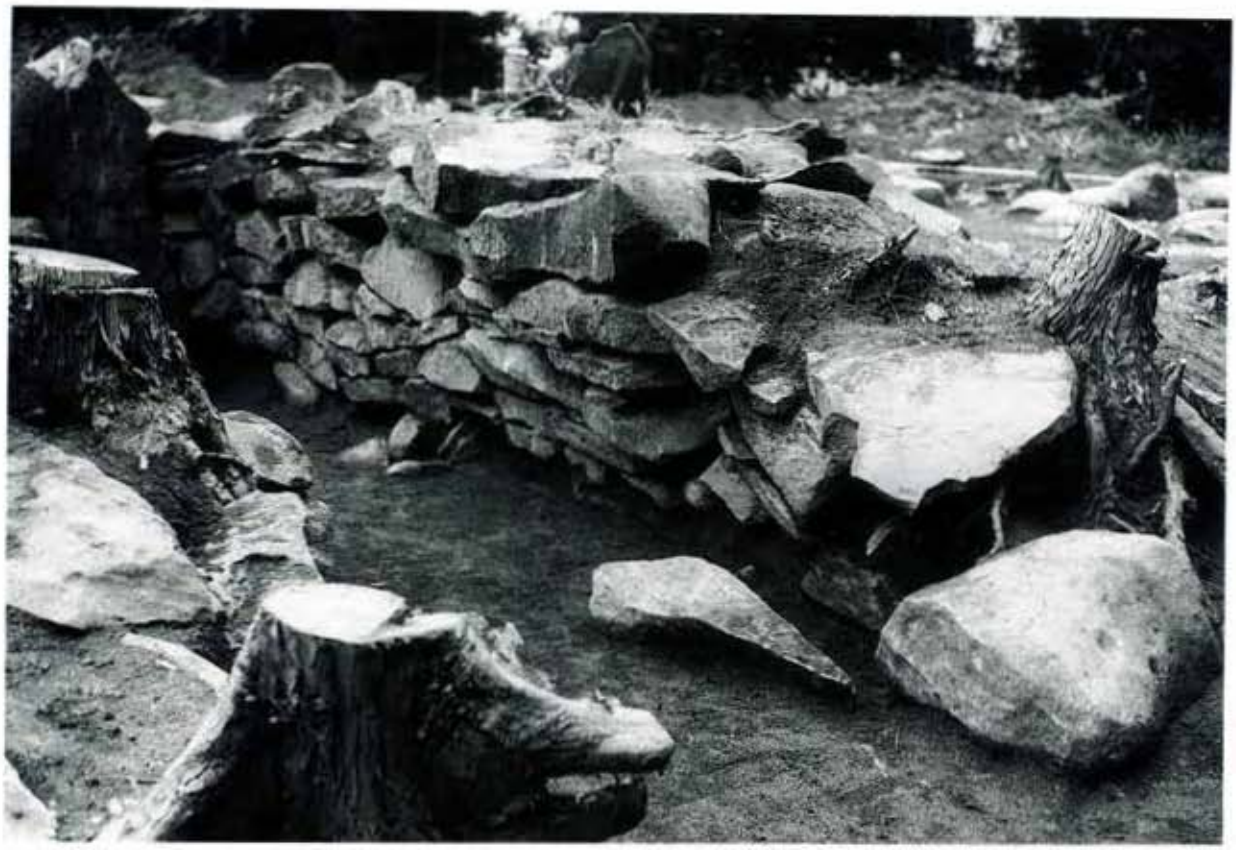
石室内表土除去後

東側壁の状況

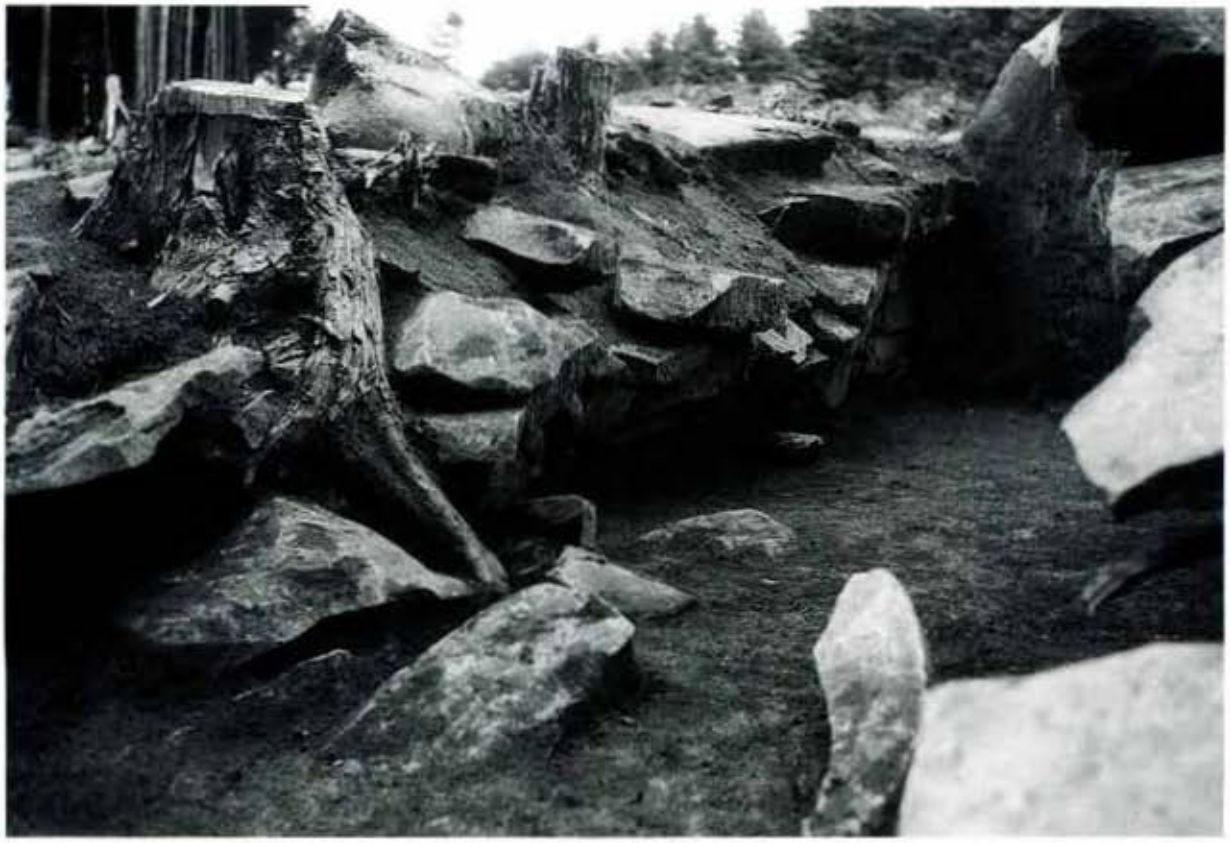
墳丘南裾の転落石

作業風景

図版 4



東側壁の状況

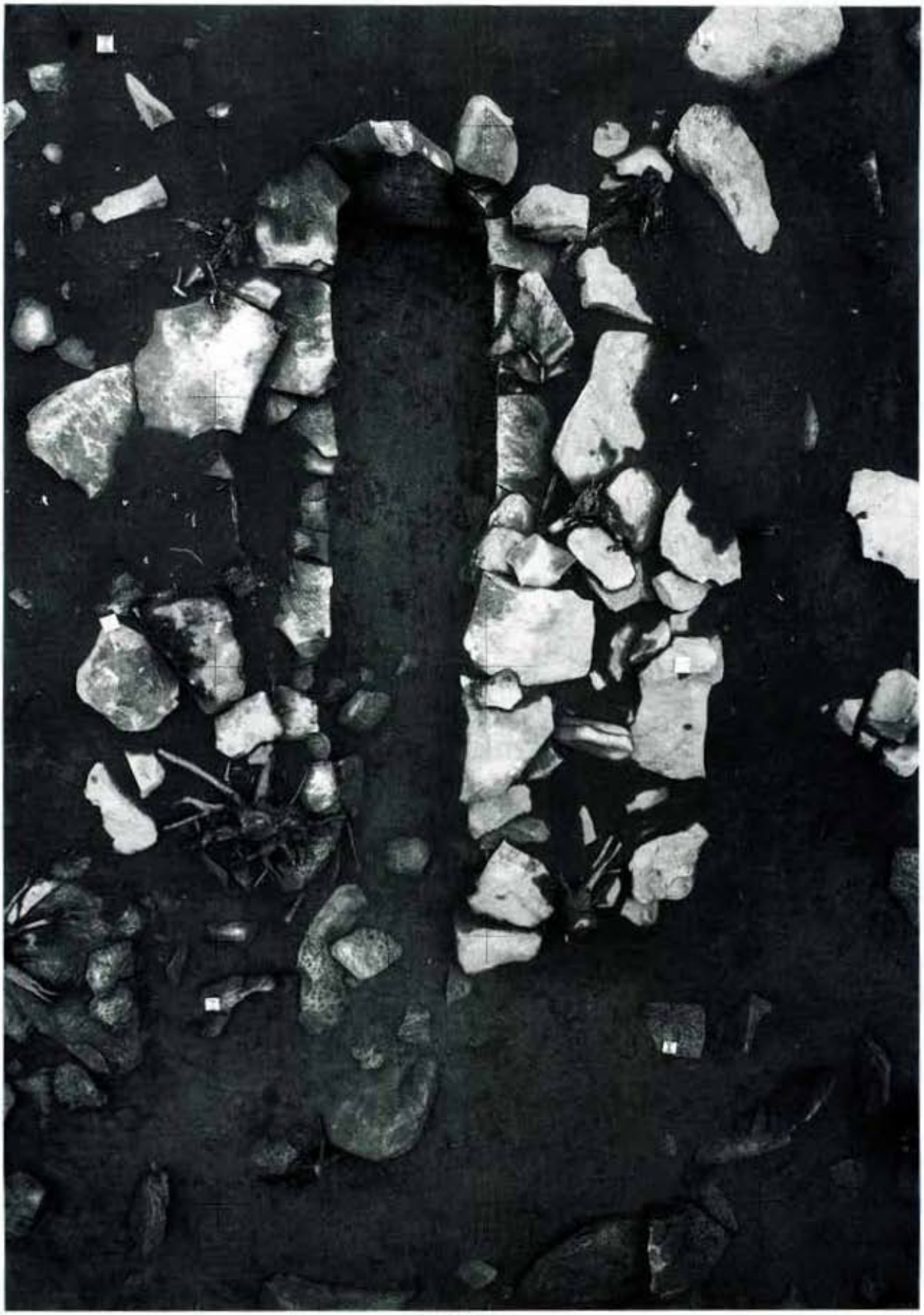


西側壁の状況

調査区全景

調査区全景

図版 6



石室検出状況

ホヤノ木古墳検出状況

奥壁及び西側壁

図版 8

奥壁裏土層

東側壁裏土層

墳丘解体状況（東側壁裏）

墳丘解体状況（東側壁裏）

墳丘解体状況（西側壁裏）

墳丘解体状況（西側壁裏）

奥壁自然石転用状況

墳丘解体状況

東側壁裏墓坑検出状況

東側壁裏墓坑検出状況

西側壁裏墓坑検出状況

西側壁裏墓坑検出状況

西側壁

土坑 1

土坑 2

土坑 3

図版10

土坑 4

土坑 5

遺物出土状況

遺物出土状況

土師器・須恵器・直刀

土師器・須恵器

縄文土器・石器

打製石斧

報告書抄録

ふりがな	ほやのき　こふん
書名	**ホヤノ木古墳**
副書名	県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業乙姫２期工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	春日井恒、原寛
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　Tel058(237)8550
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ホヤノ木古墳（ほやのき）	岐阜県恵那郡坂下町（ぎふけんえなぐんさかした）	21561	01493	35° 33′ 5″	137° 31′ 37″	19980601 ～ 19980930	延べ 800㎡	県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業乙姫２期工事に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ホヤノ木古墳	古墳	古墳時代	円墳（横穴式石室）	土師器 須恵器	無袖横穴式石室
		縄文時代	土坑	縄文土器 打製石斧 石鏃	植物食料採集地か

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第49集

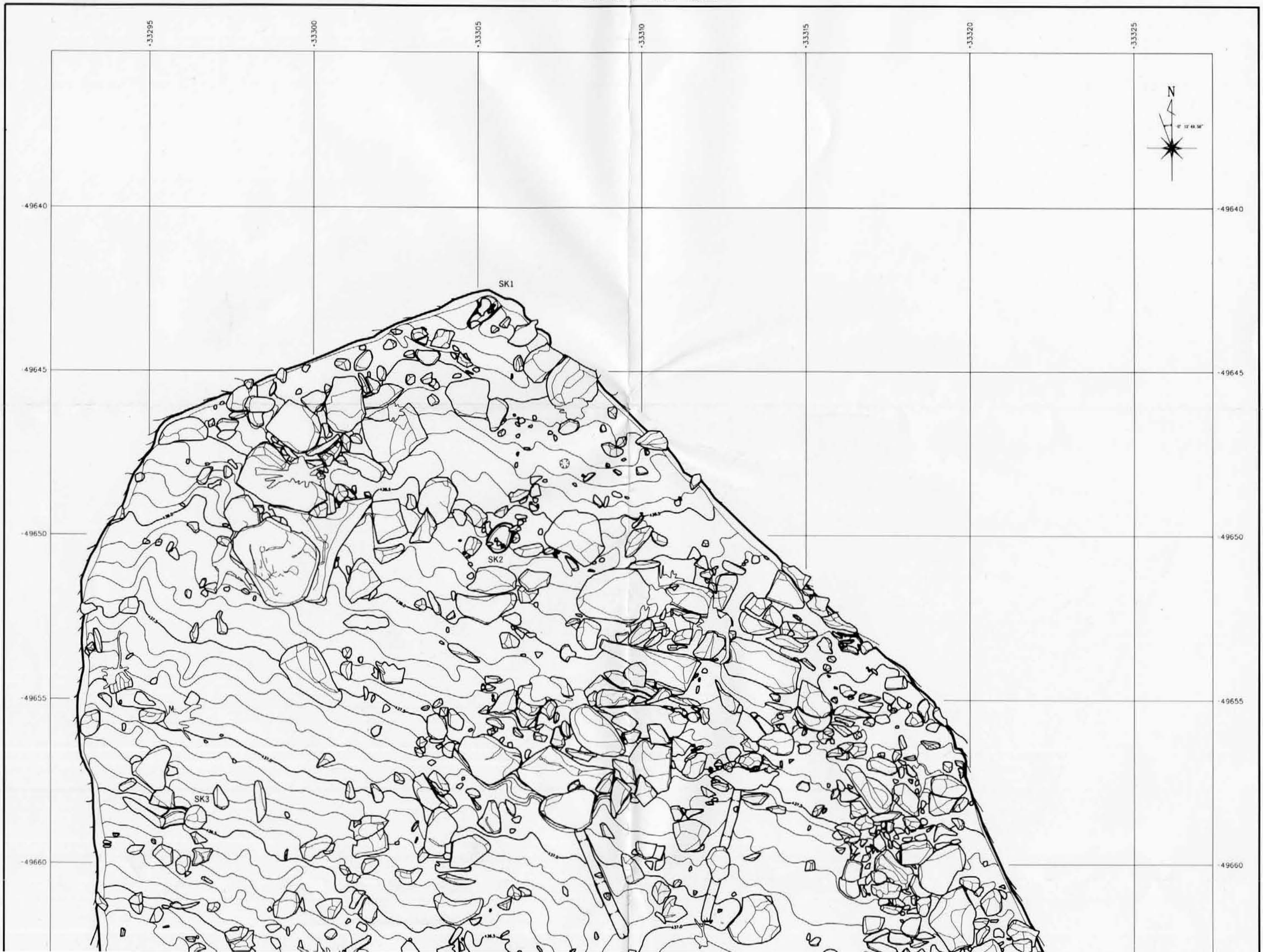
ホヤノ木古墳

県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
乙姫２期工事に伴う緊急発掘調査報告書

1999年３月31日

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東１―26―１
印　　刷　西濃印刷株式会社

撮　影　平成10年8月　カメラNKW/E　座標系第 7系
計　測　平成10年9月　解析図化機 DSR15　等高線間隔 10cm

1:100

付図　ホヤノ木古墳　調査区　平面図